無名のエース

籠村球善

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無名のエース

【Ｎコード】
Ｎ３１９９Ｖ

【作者名】
籠村球善

【あらすじ】
全国的にも有名な無敗神話を誇るバスケットボール強豪中学校。
その神話を人知れず打ち砕いた、ある無名の中学校があった……
……
そんな出来事から3年。とある少年は全国大会常連の高校に入学し、一年でエースになることを決意する。

プロローグ　勝ち取ってやる

バスケットボール

アメリカ発祥のスポーツで、漢字では『籠球』と書く。漢字の通り、ゴールが籠の形をしているからつけられた名前だとか、そうじゃないとか。

とにかくバスケは今や、中学・高校生はもちろん、大学生や社会人にも広く親しまれている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

開翔中学バスケ部

十余年に渡り、全国中学バスケットボール大会において全て優勝、無敗神話を誇る中学校である。

このバスケ部でスタメンを勝ち取った者は、引退前後を問わず、多くの強豪校からスカウトを受ける。そして、将来その高校のバスケ部のユニフォームを着ることを約束される。

そんな誰もが憧れる、絶対的な強さを誇る中学校だが、ただ一度だけ、無敗神話が破られた時があった。

それは三年前、ある中学との練習試合のときだった。スタメンは全員万全の状態で、慢心も一切なかった。しかし、開翔中学はこの試合で、約十年ぶりの黒星をあげることとなった。

その相手校は全国的に、いや、地区的にもその名が上がらない、全くの無名校だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『やべぇ……スッゲー緊張する』
『私の番号、あるかな……』
『あ、あった！　やったー！』
『え？　あれ！？　お、俺の番号は……！？』

3月。私立高校入試の合格発表の日。

多くの中学生が、不安そうな表情で高校の校舎に入っていく中、前髪が長いボサッとした黒髪を持つ少年は、校門にもたれながら、一つ大きく欠伸をした。

門の中では、同じ年の中学生の、歓喜、悲愴の声が響いている。ハイタッチをして喜びを分かち合う女子もいれば、不合格のショックから男泣きをする男子もいる。

彼はそんな集団をつまらなさそうに一瞥すると、手に持っていた、オレンジ色をしたゴム製のバスケットボールを、指先でクルクルと回し始めた。

その行動に、合否を見に来た中学生から視線を受けるが、彼はそんなものを気にする様子はない。

そして、もう一度大きく欠伸をすると、俺も見に行かないとな、と誰も聞こえないような小声で呟き、ボールを回しながら校舎内へ入っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ、おかえり、海斗。私立、どうだった？」

海斗と呼ばれた少年が家の玄関の扉を開けると、中からエプロンをつけた母親が、パタパタと駆け寄ってきた。

「別に。普通に合格」

海斗は短く返事をすると、靴を脱いでボールをケースの中にしまい、ボリボリと頭を掻きながら、リビングのソファーへと向かった。

母親はそのままキッチンに向かい、夕食の準備を始めた。

「にしても、良かったわね。なんとか近所の私立校に受かって。専

願だから、落ちるのが心配で……」
「落ちるわけねえだろ、あんなレベルの低い高校」
「ま、それもそうよね」

海斗はソファーにドカッと座り込み、テーブルの上にあるクッキーに手を伸ばす。

「ホントはレベルの高い公立校に行って欲しかったんだけどね」
「今さら遅いよ。自由に選んでいいって言ったのは母さんだろ」
「そうね。別に母さんは後悔はしてないわ。貴方の選んだ道だもの」
「……」

海斗は無言でクッキーをかじる。

「ところで、部活は何するつもりなの？」
「……それ聞く必要あるか？」

海斗はジト目で母親を見つめる。母親は、フフッと笑って、料理をする手を止めた。

「あの高校って、バスケ強いの？」
「ああ。全国にも結構出てる」
「へぇ……じゃあ、海斗も三年になったら全国の選手ね！」

母親が笑いながら言うと、海斗は立ち上がり、

「三年からじゃねえよ。俺は一年からエースの座を勝ち取ってやる」

と、母親の言葉を否定し、自分の部屋へと足を進めた。

第１Ｑ　連れてってくれへん？（前書き）

挨拶が遅れました。

駄文ですが、よろしくお願いします。

第1Q　連れてってくれへん？

『新入生の皆さん。茨山高校へのご入学おめでとうございます。私はこの学校の校長を勤める――――』

体育館の壇上で、スーツをきた四、五十代の女性が、大勢の生徒を前に新入生への祝辞をしていた。

そんなバーサンの言葉には微塵も興味がない俺、篤川海斗（とくがわかいと）は、少し長い前髪を弄りながら、周りの新入生を見渡していた。

話は変わるが、俺は元々頭が良い方だ。公立入試の模試では、常に偏差値７０代をキープしていた。中学生のときも、常に学年順位は一位だった。

だが、今俺がいるここ、私立茨山高校は、偏差値５０程度の、学力レベルの高い高校とは呼び難い学校だ。

少なくとも、偏差値７０の優等生が好き好んで受ける場所ではない。

――では、何故俺はここにいるのか。

ここは学力は普通でも、バスケの実力は並みではない。

茨山は高校バスケ界では有名な方で、何度もインターハイに出場し、全国ベスト８に輝いた経験も持つ、強豪校だ。

学力が高く、且つバスケも全国レベル、という高校はあるにはある。例えば、京都の洛難高校など。しかし、そこは察してくれ。俺は寮の独り暮らしで生きていく自信はない。

つまるところ、俺はこの高校でバスケットがしたいが為に、ここ

を受けたのだ。

『――以上で、第２０１１年年度私立茨山高校入学式を終了致します』

俺がごちゃごちゃと回想をしている間に、入学式は終わったみたいだ。ナイスタイミング。空気読めてる。

後は教室に戻って、プリント類を配って終わりである。

俺は長時間座っていた所為で固まった体をゆっくりと持ち上げ、列に沿って体育館を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『軽音部、入りませんか～？』

『男なら野球だろ！』

『サッカー部、どうよ！？』

『茶道部！　茶菓子食べ放題！』

校舎から一歩足を踏み出すと、部活勧誘でたじろぐ新入生と、呼び込みで新入生に話しかける上級生の姿が目に入ってきた。

「暑苦しいな……。バスケ部ってドコだ？」
俺は『部活ブース案内』と書かれた看板で、バスケ部の案内の場所を確認することにした。

「えっと、バスケ……は……っと。駐輪場前か」
「お？　ジブンもバスケの案内行くんか？」

看板を覗いていると、不意に後ろから関西弁で声を掛けられた。
「やったらボクも連れてってくれへん？　ボク、えらい方向音痴でな～」

聞いた感じ、少し高めの男の声だ。内容的に新入生、バスケ部希望の奴だろう。
そう軽く予想を立てて、後ろを振り向く。

しかし、その予想は少し外れていた。

肩より少し下まで伸びた薄い茶髪。
高校男子にしては少し低めで小柄な体躯。　そして、何と言ってもその男子の境界を大きく逸脱した女顔。しかも美少女。かなりの。
中性的な顔立ちの人はいくらでもいたが、ここまで女の方にメーターが傾いた中性は見たことがない。
よくよく思い返してみると、先程の声も、高めの男の声というより、寧ろ女の声に近かったかもしれない。

（なんだ、ただの女子か）

軽く現実逃避をした後、一応適切な返答を試みる。

「女バスか？　だったら校門の方にあるぞ」
「ちゃうちゃう。男バスや。だ・ん・バ・ス」
「え、ああ。マネージャー希望？」
「ちゃうわ！　キチンとした、選手希望！」
「や、やめとけって。絶対バレるぞ。『花ざ〇りの君たちへ』じゃないんだから」
「ボクは普通に男や！　ホラ、ちゃんと男子の制服着とるやろ」

確かによく見ると、そいつは俺の着ているものと同じ、紺色の男性用のブレザーを着ていた。

「……世の中は広いんだな」
「……何や？　この納得してもうたのに、こっちが納得いかへん複雑な状況」

男の子、いや、男の娘だな。この場合。
フィクションなら見かけないこともないが、現実で見るのはこれが初めてだ。

「それより、や。ジブンもバスケ部の案内行くんやろ？」
「ああ。一応な」
「ほな、ボクも一緒に行くから連れてってーな」

そいつは両手を合わせて、片目を瞑りながら俺に頼み込む。
こいつ、服が男用であること以外、男要素０だな。
「まぁ、別に断る理由もないな」
「ホンマに？　助かるわぁ～。あ、ボクの名前は宮元礼（みやもとれい）や。よろし

ゅうな」
「篤川海斗だ。よろしく」
お互いに軽く名前を言い合って、バスケ部の案内の場所へと向かった。

「いや〜、やっぱ大阪とは違うな。埼玉は道が複雑でよう迷うわ」
「……ここは神奈川だ」
「ああ、すまんすまん。何分、方向音痴やからな」
「それでも間違えねぇよ、普通は」

第１Ｑ　連れてってくれへん？（後書き）

誤字脱字、あれば指摘お願いします。

第２Ｑ　ふるい落とし（前書き）

プロローグと第１を少し訂正しました　８／１

第２Ｑ　ふるい落とし

「うわ～。えらい並んどるな。受付まで時間かかるで」
「めんどくせ……」

今、宮元がいった通り、バスケ部の受付の前には長蛇の列が形成されていた。
見た感じ、体格が良い奴や運動神経が良さそうな奴もいるが、大半はおもしろ半分で並んでいる奴だ。全国レベルのバスケ部だ。バスケをやっていなくても入ってみたいだろう。

「面倒だが、ここで突っ立ってても時間の無駄だ。さっさと並ぶぞ」
「ん。せやな」

とりあえず、俺達もその列に加わった。
受付に辿り着くまで、軽く２０分はかかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「すいません。場所、間違えてませんか？」

宮元が受付の男の人に言われた第一声だった。

「間違えてまへんよ。ボクも“男バス”の“選手”希望ですから」

「……？」

受付は宮元の顔を凝視する。

そして一言。

「まさかｗｗｗ」

「うっわ、ボクめっちゃバカにされとる！」

「自然の摂理だ。諦めろ」

「おい！　それもおかしないか！？」

宮元は受付にバカにされたからかギャアギャアと騒ぎだした。受付の方も「ないないｗｗｗ」とか言って笑っている。

それが更に宮元を怒らせたのか、とうとうしまいには「そんなに信じてもらえへんなら、上でも下でも脱いだるぅぅぅ！」とか言い出すはめに。

流石にそれは問題になる（男でも女でも）ので、全力で止めた。受付もその発言で（半分）納得したようだ。

「……じ、じゃあ、この紙にクラスと番号と名前書いて。あと、身長と体重、出身中学もね」

そう言われて、それぞれ申し込み用紙のようなものを渡された。

（えっと……クラス……１年Ｃ組、２３番……篤川海斗、っと。……身長体重か……えっと……１８４ｃｍ、７５ｋｇ……出身中学、

は――）

用紙の書き込みをしている間、ふと隣の宮元の紙が気になった。

１年Ｃ組３４番　宮元礼

１６７ｃｍ　５６ｋｇ

今尾東中学校出身

女子のような整った字で書かれた用紙。

今尾東っていったら、全中のときに出てた大阪の中学だったか？

結構実力もあるのか、コイツ。

「ん？　なんや。同じクラスやったんか」

どうやら、宮元の方も俺の用紙を覗いていたようだ。

よく見れば、クラスのところには同じＣ組が記入されていた。入学初日とはいえ、こんな個性丸出しの奴を見落としていたとは……

「出身中学は……聞いたことないな」

「地元の学校だからな。知らないのが普通だ」

「……ふうん」

「さて、用紙は書いたか？」

受付が尋ねてきたので、俺達は記入済みの用紙をその人に差し出

した。

「……オーケー。じゃあ、入部希望の人は次の水曜日、１２時半にここに集合して」

「わかりました」

「じゃあ、バスケ部の五年間の成績渡しとくから、できれば見とい て」

そう言って、Ａ４サイズのプリントを渡すと、受付は次の人の案内を始めた。

俺は渡されたプリントに目を通す。

「いや〜。やっぱスゴいわ」

「たしかに。さすが茨山だな」

見ると、茨山が出場した大会と、『優勝』の文字がプリントに陳列していた。

優勝していない大会は、夏の全国大会『インターハイ』と、冬の全国大会『ウインターカップ』のみだった。

強豪とはいえ、五年間、それ以上もトップを取り続けるのは伊達じゃない。

「んで、次の水曜日にまたここに来んねんな？」

宮元が顔をこっちに向けて聞いてきた。

「そう言ってたな」

「じゃあまた連れてってな」

そして、さらっと意味不明な言葉を発する。

「はぁ？　お前、何言ってんの？　一回来たからわかるだろ？」
「方向音痴やからすぐ迷子になんねん。この高校、めっちゃ広いからな」
「そ、それは否定しないが」
「ほな、よろしゅうな～（ダッ）」
「ちょ、まっ……って早っ！？」

宮元は全力疾走で逃げていった。

「はぁ……。ん？　そういえば次の水曜日って――」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「――スポーツテストの日じゃねえか」
と、体操服をきた俺は駐輪場前で肩を落とす。
念のため（↑ここ重要）宮元を連れて集合場所に来てみると、すでに結構な数の男子が集まっていた。

「お！　アイツ南飯嶌中の小田やん！　傘前中の砂灘もおるやん！」

宮元は一人でテンションが上がっていた。
その顔と男物の体操服が見事にミスマッチしている。

「はーい、静かにー。集合してー。全員居るかー？」

不意に校舎側から男の声が聞こえ、全員が注目する。

「注目ー。俺は茨山高校三年、男子バスケ部の副キャプテンの丈田元基でーす。よろしくなー」

気の抜けるしゃべり方で、自分の名前を名乗る。

「さーて。今年は入部希望者がなーんと30人もいます。正直いってスゴーク驚いてまーす」

真顔で言っているため、驚いているようには思えない。

「てなわけでー。このあまりにも多すぎる希望者をふるい落としまーす」

ふるい落とし

そう言った瞬間、集団の空気が一気に真剣なものとなった。

「つまり皆には、『入部試験』なるものを受けてもらいまーす」

そして、丈田先輩はそう言い放った。

第３Ｑ　第１試験

『入部試験？』
『そんなものがあったのか……？』
『受かる自信ねー……』

丈田先輩の発言で、集団にざわめきが生まれる。

「はーい、静かに。今から内容を説明するからねー」

丈田先輩は一旦集団を静め、試験内容を説明した。内容は次の通り←

・試験は第１試験、第２試験と二回に分けて行う。
・第１試験は本日の昼から二日間にかけて実施されるスポーツテストを評価の判断材料とする。
・基準は、全種目でどれか一つでもトップになった者、全種目でベスト３以上のものが三つ以上ある者、総合の学校内順位が３０位以内の者、の三つの条件で判断する。（この条件に適する者は評価が高い）
・なお、推薦で入学した者も、同じ条件で試験を受ける。

相当厳しい試験だ。
つまり、どれだけ体格が良くても、技術があっても、このスポーツテストで躓くと不利になるということだ。

『おいおい……。条件ムリすぎだろ』
『オレ絶対どれにも適さねえよ』

『つか、これだったら推薦もらった意味なくね？』

周りも考えは同じのようだ。

「はっはっは。中々にキビシイやんけ！　こりゃちょっと努力せなな！」

ニコニコ笑いながら言う宮元（見た目美少女）。心なしか、周りの奴らの顔が赤い。

「さーて、説明はこんなもんかなー。じゃー、バスケ部入部試験、スタートォ！」

丈田先輩の開始の合図で、３０人弱の集団が一斉に散らばった。

「さて、ボクらも行こか。入部試験」

「言ってもただのスポーツテストだがな」

俺達も始業のチャイムに遅れないように、駐輪場を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

５０ｍ走・・・

「お、ラッキー！　ボク走んのめっちゃ得意やねん！」
「昨日すげえ逃げるの速かったからな……」
「順番は……篤川クンと一緒やな」
「……マジかよ」

・・・・・・・

『5．8秒！？』
『マジか！？　高1じゃあり得ねぇぞ！？』
『つか、めっちゃカワイイぞ、あのコ！』

「は、早すぎる……」
「はっはっは！　ま、篤川クンも中々のもんやったで」
「けっ。6．3と5．8の壁は厚いんだよ」
「たった0．5秒やけどな……。ま、50m走はボクの一位で決定やろ。ほな、次行こか」
「そうだな。だが、その前にお前にまとわりついてる男共をなんとかしねぇとな」
「うおっ！？　な、何や！？　なんで皆ねっとりした目付きでボクを見るんや！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

握力・・・

「……んっ……っはぁ」

『２９ｋｇ』

「アカン、やっぱ筋力系は苦手や……。ボク、元からそんなに筋肉ついてへんし……」

「なるほど、だから余計に女っぽく見られるんだな」

「ぐぅ、否定できひんところが悔しい……。と、ところで、ジブンはどうやったんや？」

「俺か？　俺はこんなもんかな」

『４３ｋｇ』

「う、羨ましい……」

「握力を羨ましいとか言われてもな……」

「ど、どないしたらこんなに筋力が強くなるんやろか……」

「遺伝じゃね？　力強い親から生まれた子は、力強く育つもんなんだよ」

「さよか……。じ、じゃあ、ボクに筋肉がつかへんのは遺伝の所為でもあると」

「まぁ、筋トレとかしとけば、遺伝に関係なく筋肉はつくけどな」

「……！　……よし、忘れよう！　これはなかったことにして、次行こう！」

「ポジティブだな、お前……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

２０ｍシャトルラン・・・

『……８９』

「なぁ、宮元。しりとりでもしねぇか？」
「なんやいきなり、藪から棒に」
「暇なんだよ。ちょっとぐらい付き合えよ」
「いや、別に今やることでもないやろ。後で付きおうたるから」
「じゃあ俺からな。『失血（しっけつ）』」
「いや、始まり方おかしいやろ！　大体ボク後で付きおうたるって言ったよな！　たった今！」
「宮元、『つ』だぞ」
「いや、だからな……」
「『つ』だぞ」
「ぐっ……、つ、『ツツジ』」
「じ、『事故（じこ）』」
「こ、『告知（こくち）』」
「ち、『窒息（ちっそく）』」
「……。く、『櫛（くし）』」
「し、『心臓麻痺（しんぞうまひ）』」
「趣味悪いわ！！　なんで全部『死』に繋がるワードやねん！！」
「笑えるだろ？」
「笑えるか、アホ！！」
「おっかしいな。中学のときはバカウケだったのに」
「その中学は魔窟か！？　これ聞いてバカウケするって、どんだけひねくれてんねん！」

「ところで、宮元よ」
「あ、何や？」
「さっきから線、踏めてねぇぞ」
「先言えやぁぁぁぁぁ！！」

『宮元、１０２回』
『篤川、１２９回』

「……篤川クン。何か言い訳は？」
「……さて、次行こうか！」
「あ、こら、逃げんなぁ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊

一日目終了。放課後・・・

「なんや、どっと疲れたわ……」
「シャトルランのときに大声出すからだろ。自業自得だ」
「ジブンのせいやろ！？　なに関係ない風を装っとんねん！」

正直、罪悪感はある。ちょっとした暇潰しのつもりが、こんな結果を招くとは。

「体力テストは明日もあるんだ。そこで巻き返せばいいだろ」
「たしかに、明日で挽回すればええしな」

よし、なんとか宮元も納得してくれたみたいだ。

と、いうわけで……

「俺はそろそろ帰るな」
「――けど、それとこれとは話が別や（ガシッ）」

回れ右をした俺の肩を、宮元が凄い力で掴んでくる。
あれ？　たしか、宮元の握力って２９ｋｇしか無いんじゃなかったっけ？　何故か肩がミシミシいってますよ？

「さて、どう落とし前つけてくれるんやろか？」

超満点の笑顔で尋ねる宮元。
見た目は美少女なのに、オーラだけはどこぞのヤクザのそれだ。

「え、えっと……」
「えっと、何や？」

……何？　この娘、超怖い。

「マ、マックでも奢ってやろうか？」

シバかれるの覚悟で提案してみる。
それに対し、宮元は――

「え、マジで！？　ありがとぉーっ！」

めっさ機嫌直った。

そして、目にも止まらぬ早さで帰り支度を終わらせ、俺の手を引っ張ってくる。

「何しとんねん！　はよ行くで！」

「ちょ、まっ、そんな急がなくても――」

「はよ行かな、いい席無くなるし、てりやきチキンバーガーも売り切れるかもしれんやろ！？」

「売り切れるか！　いいから落ち着け――ちょっ、待てぇぇぇぇぇ！！」

終始興奮しっぱなしの宮元は、シャトルランのときの出来事など、とうに忘れてしまっていたようだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「マクドナ〇ドの略称って、マックとマクド、どっちが正式なのかしら？」

「はぁ……」

一気に軽くなった財布に落ち込みながら家に帰ると、母さんが突然ワケのわからないことを聞いてきた。

……どうでもいい。

と、答えたいのはやまやまだが、ここは敢えて質問に答えてやることにした。

「なんか、関東と関西で呼び方が違うんだとよ」

そうゆう話を以前耳にしたことがある。関東は『マック』が主流で、関西は『マクド』が主流だとか。嘘か本当かはわからないが。実際、関東でもマクド〇ルドを『マクド』と呼ぶ奴いるし。

「ふうん。そっかぁ……」

俺の返答を聞いた母さんは、少し残念そうな顔をして、キッチンへと向かった。納得のいく結論が出なかったからだろう。

そもそも、何故母さんはこんなことを聞いてきたんだ？

俺が聞こうとする前に、母さんの口が開いた。

「ところで、今日海斗と一緒にいたあの娘は、学校のお友達？」

「ブフッ！」

そうゆうことかい。

恐らく、帰りに宮元とマックに寄ったのを見たんだろう。そこまでは問題ない。

ただ問題は、宮元が３６０度どこから見ても女であること。ただこの一点だけで、見た感じが男同士の食事から若いカップルのデートに様変わりしてしまう。

この誤解はなんとしても解いておかなければ。俺に薔薇の趣味はない！

「あ、ああ。クラスの友達だ」

「へぇ……。クラスの友達、ね」

母さんのニヤニヤした笑顔が無性にムカつく。

さらに弁明を。

「あのなぁ、母さん。アイツはああ見えても、一応は男だ。男子の制服着てただろう？」

「あら、海斗。随分と誤魔化し方が下手になったじゃない」

ダメだ。アイツは女だと信じて疑わない。こうなったら……

「なぁ、母さん。本当なんだって。本当にアイツは男なんだよ」

「だから、嘘をついたって無駄――」

「これが嘘をつく人間の目に見えるか？」

俺、超真剣な眼差し。

「……見えないわね」

「わかってもらえて何よりだ」

納得した様子の母さん。誤解が解けて本当に良かった……。

「けど、安心して」

「ん？」

「――母さんは薔薇でもＯＫだから！」

安心できねぇよ、母さん！

俺の心の叫びは母さんには届くことはなく、母さんは夕食作りに没頭している。

午後7時。いつも通り母さんと二人きりの夕食だ。本日のメニューは……トンカツだな。

俺の家は、俺と母さんの二人＋柴犬一匹（名前：ケン）で構成されている。

父さんは出張で世界中を渡り歩いているので、家にはめったにいない。盆と正月に一日だけ帰ってくるぐらいだ。その日に限り、母さんのいつもの笑顔が太陽のように輝きを増す。

夕食の匂いを嗅ぎ付けてか、ケンが足元に寄ってきて、ピョンピョンと跳ねる。

母さんは、そんなケンにエサを与えながら話を振ってきた。

「部活の方は大丈夫なの？　あそこのバスケ部って、入部試験があるんでしょ？」

「え？　なんで母さんがそのこと知ってるんだ？」

「昔、『あの人』が言ってたのよ」

と、母さんは懐かしそうに言う。

「ああ……そうだったか」

「で、どうなの？」
「まだ、何とも言えない。スポーツテストしただけだし」
「ま、海斗なら絶対合格できるよ。だって、『あの人』が教えたバスケットだもの。落ちるハズがないわ」
母さんがニッコリと微笑む。まるで聖母のような温かみのある笑顔で。
「……当たり前だ。こんなとこで躓いてたまるか」
俺はそう言うと、食べかけだった夕食に手をつけた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「一年生の諸君。二日間のスポーツテスト、ご苦労だった。俺はキャプテンの蛇手啓一（だてけいいち）だ」
スポーツテストも終わり、放課後。俺達は再び駐輪場前に集合させられていた。
蛇手先輩の手には、なにやら書類のようなものがあった。
「全員のスポーツテストの結果は、既に俺の手に渡っている。大体の評価もつけ終わっている」

蛇手先輩が手に持った書類を提示した。あれは俺達のスポーツテストの結果が書かれたもののようだ。

「さて、これを踏まえて、第２試験の内容を説明していく。一度しか言わないからよく聞いておけ」

その言葉で、集団が静まる。

第２試験の内容は次の通りだ←。

・スポーツテストの成績を元に、５人×６のチームに別れる。
・それぞれのチームは、上級生と１０分間のゲームをする。
・ゲーム内でのプレイで最終的な評価をつける。
・なお、推薦で入学した者も、同じ条件で試験を受ける。

なるほど。第１試験が身体能力（フィジカル）なら、第２試験は技術能力（スキル）を見るわけだ。

「これで試験は最後だ。実施日は来週の月曜日。第一体育館に４時集合だ。遅れたら、合格はないと思え。以上」

蛇手先輩は端的に言い残すと、校舎の中へ入っていった。

それにより、さっきまで集団を支配していたピリピリした空気から解放される。

（第一体育館ねぇ……。場所確認しとかねぇと――）

と、考えたところで、後ろに気配を感じた。

「さて、篤川クン」

「……なんだ、宮元」

飛んでくる言葉は容易に想像できた。

「と、いうわけで。よろしゅうな、道案内」

「……はい」

呆れて、断る気になれなかった。

第４Ｑ　第２試験

「おお、もう結構来とるな」
「ったく……お前がちょくちょく迷子になるから……。２０分前にはつくハズが……」
「ははは。間に合ったからええやん。気にすることないって」
「原因が言うな！」

俺達が集合場所に到着したのは、集合時間３分前というギリギリの時間だった。
少し運動不足気味だったから、時間まで体を動かしていようという俺の計画は、この方向音痴の迷子野郎が見事にぶち壊してくれた。
「ま、ボクはちゃんと運動しとるから、時間ギリギリでも平気やけどな」

その迷子野郎（宮元）は足首を回しながら飄々としている。
「一発殴らせてくれねぇか？　大丈夫、すぐに意識がトンで痛みなんか感じねぇからさ……！」
「じ、冗談やって！　あ、ホラ、キャプテンが来はったで！　集合せな！」
「ちっ……殺るのはまた今度だ」

俺は仕方なく宮元をシバくのを中断し、入り口の側にいた蛇手先輩の元へ駆け寄った。一応逃がさないように、宮元のすぐ後ろに立っておく。
集団の中心にいる蛇手先輩は、先日も持っていた書類の束を小脇に挟んでいた。

「全員いるな？　じゃあ、チーム分けを発表するぞ。スポーツテストの結果でわけているから、ポジションが偏っても文句は聞かないからな」

そして、持っていた書類を次々に読み上げて、集団をA～Fまでのチームに分配した。俺はFチーム、宮元はAチームだ。

「それじゃあ、チームに別れて15分程ミーティング。役割をそれぞれ分担しろ」

蛇手先輩の言葉で集団がぞろぞろと六つに別れていく。

「ほな、ボクはAチームやから。お互い頑張ろな」
「ああ。終わったら血祭りに上げてやるから待っとけ」
「どんだけ根に持っとんねん！」

宮元と一旦別れて、Fチームの集まりの元へ行く。

「ったく、遅いな！　この僕をどれだけ待たせるつもりなんだ！」

着いた途端、短髪の170ぐらいの奴がいきなり怒鳴ってきた。

「ああ、すまん。ちょっと友達と喋っててな」
「ふん！　まぁ、それぐらい許してやるさ。この僕がいるチームならミーティングなんて必要なしだし。なんせ僕は、開翔中出身だからね！」

そいつは周りにも聞こえるような声で自慢するように言った。

この言葉で周辺にざわめきが生まれる。

『か、開翔って……あの……』

『ここ13年間“ほぼ”負けなしの、無敵の中学校か……？』

『そんなやつもいたなんて……』

そのざわめきを聞いたそいつは、満足そうに座り込んだ。

「ま、まあ、とりあえず自己紹介でもしない？　名前が分からなかったらどうしようもないでしょう？」

チームの一人の奴がそんな提案をする。

「まぁ、そうだな。じゃあ僕からいかせてもらうよ。僕は石太成宗（いしだ なりむね）、開翔中学校出身だ。ポジションはフォアード。ま、僕に任せてくれればいくらでも点を稼いでやるよ」

石太は開翔中出身であることを見せつけるかのように告げる。他のやつらを下に見ている感じが頭にくる。

「じゃ、じゃあ次はオレだな。オレは――――」

と、次々に名前とポジションを告げていく作業を続けて、簡単に作戦も立てた。（とはいえ、ほとんどが石太のドライブプレイだが）チームメイトは、俺、石太、中田、西山、木村の5人だ。木村がセンターを務めてくれるお陰で、ポジションのバランスはなんとかなった。

「ま、精々僕のサポートを頑張ってくれよ」

石太が偉そうに話しかけてくる。俺はとりあえず無視を決め込んだ。

「……ったく、んだよアイツ。愛想悪いな」

後ろでなにか呟いていたようだがそれも無視し、残りの時間は体を動かして、少しでも体を暖めていた。

「……よし、15分だ！　今から第2試験を開始する！　始めはAチーム、出てこい」

蛇手先輩の声と共に、黄色いゼッケンを着た上級生5人がフロアに出てきた。

「おっしゃ！　ほな、行ってくるで！」

「ああ。殴られるだけの体力は残しとけよ」

「まだ許してくれへんのか！？」

「冗談だ」

ったく……と、青いゼッケンを着た宮元を含めた5人がフロアに出ていく。

「試合は10分間の1Qのみ。タイムアウトはそれぞれ一回、誰かが審判に申告すれば取れる。分かったか」

「「「うっす！」」」

「よし、それでは試合を開始する！　礼！」

「「「おねっしゃーす！」」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

残り5分。全体の半分の時間が経過した。
その流れゆく試合経過を俺、蛇手啓一は書類に目を通しながら見ていた。
点差は一年チームが6点を追う状況となっている。上級生相手にこの点差はなかなかのものだ。
その最大の要因が……

「おっし、マイボールや！　一本、確実に攻めるで！」
「「「「おう！」」」」

……この関西弁で女顔のガード。
こいつの的確な指示と正確なパスで、味方の持ち味が最大限に活かされている。そのお陰で、それぞれがのびのびとプレイが出来るようになり、結果シュートもよく入る。　更にはチームプレイも織り交ぜた完成された攻撃。たった15分のミーティングで作り上げたとは思えない完成度だ。
そして、自分の持ち味の俊足で電光石火のような速攻を仕掛け、確実に点を稼ぐ。まさにガードの鏡のような男だ。
（今尾東中の宮元、か……。他にも有名中学の新人も多数……今年はかなり期待できるかもしれないな！）

俺が心の中でニヤッと笑ったと同時に、試合終了のブザーが鳴った。6点あった点差は一気に2点まで迫っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いや～、もうちょいで、いけたんやけどな～。惜しかったわ～」

試合を終えた宮元が悔しそうな表情で戻ってきた。試合中、かなりの声を出していたにもかかわらず、その顔には疲れが一切見られない。

実際、宮元のゲームメイキングはかなりのものだった。まるで、初対面ではないようなチームワークだ。

「あの四人は知り合いだったのか？」

「ん。いや、ボクは初めてやけど、他の四人は知り合いやったんや。大阪人は人付き合いが上手いやさかい。5分もあれば、他人と仲良うなるのは造作もないこっちゃ」

「なるほど。大阪は詐欺師の育成所みたいな場所なんだな」

「否定はせえへんな。ま、皆人がええから、詐欺師なんて一人もおらんけど」

宮元は、ははは と笑うと、Aチームのメンバーの元へ行った。5人で談笑などして、本当の知り合いのようだ。あれが初対面とは思えない。

「よし、次！　Ｂチーム、入れ！」

再びフロアに蛇手先輩の声が響く。と同時に、青いゼッケンを着た５人が出ていく。

「試合形式は先程と同じ、１０分の１Ｑのみだ。それでは、試合開始！　礼！」

「「「しゃーす！」」」

こうして、試合はＣ、Ｄ、Ｅと次々に消化されていった。

ここまで、上級生のチームに勝ったチームは無し。最高のスコアが、Ａチームの二点差。他のチームも４～６点差にまで抑えていた。

そして、最後のチームの試合がきた。

「最後、Ｆチーム！」

「ようやく！　僕の出番がきたようだね！　この僕が本気を出したからには、必ず上級生に勝利することを約束しよう！」

石太がまた自慢げに喋っていた。周りの一年もウザそうな顔で石太を見つめている。

俺も石太にうんざりしながら整列する。

「試合形式は……もう言わなくてもわかるな。では試合開始！　礼！」

「「「しゃす！」」」

こうして、俺のチームの試合が始まった。
ジャンプボールはセンターを務める木村が飛ぶが、惜しくも相手ボールになってしまった。

「……チッ、役立たずが……」

石太がなにか呟いた気がしたが、無視してディフェンスに集中する。

「23番、チェックOK！」
「センター、中入ったぞ！」
「西山、右スクリーン気をつけろ！」

お互いに声を出しながら自陣を守る。相手は何度かパスを回した後、石太のマークマンにボールを渡した。
左サイドにボールマンを残し、他は全て逆サイドにわざと寄せる。アイソレーション、1対1を仕掛けてくるつもりか！

「石太、気をつけろ！」
「うるさい！　僕に指図を――うっ！」

石太はボールマンのドライブに反応できず、呆気なく抜かれる。

「っ！？　ヘルプ！」

中田が慌ててヘルプに出るが、マークマンが切れ込んできた所にパスを入れられ、簡単にシュートを打たれてしまった。

「くっ、すまねぇ……！」

「ドンマイ！　すぐに取り返すぞ！」

俺は悔しがる中田を励ましてリスタートする。

「くそっ、ヘルプするなら徹底的にしやがれ！」

一方、抜かれた張本人は、悪びれる様子もなく、中田を責め、走り去っていった。

「と、とりあえず一本！　じっくり攻めよう！」

ガードの西山がボールを受け取り、フロントコートまで運ぶ。

「よし、僕によこせ！　取り返してやる！」

「えっ、あ、うん」

西山のパスが石太に渡る。

石太は目の前で構えるディフェンスに向き直ると、ウィークサイドに向かって突っ込んでいった。

「よし――ぐっ！」

しかし、素早いヘルプに止められ、二人のディフェンスに囲まれる。

「石太、後ろだ！　出せ！」

俺は石太の後ろ側に回り込み、ボールを戻すように催促する。しかし、石太は俺の声を無視し、無理矢理シュートを打った。ボールはリングに当たって跳ね返り、相手のセンターがリバウンドを取っ

た。
瞬間、トップにいた相手が自陣のゴールに向かって走り出す。
「まずい！　ディフェンス、早く戻れ！」
俺が声を出すも追い付くことはできず、再び2点が相手の得点に加算された。
「ちくしょう……！　どいつもこいつも役立たずばっかりじゃないか……！」
石太の呟きは、今度ははっきりと聞き取れた。
俺はそんな石太に憤りを感じつつ、再びプレイに集中した。

第４Ｑ　第２試験（後書き）

※アイソレーション……ボールマン以外の人間を逆サイドに寄せ、エンド付近のスペースを空けるプレイ。主に１対１やカットインのプレイをする際に使われる。

誤字脱字や、→の説明に要訂正の部分があるなら、ご指摘お願いします。

第5Q　瞬間

ピィッ！

『タイムアウト、一年チーム！』

審判のホイッスルで試合が中断され、コート内の人はゾロゾロとサイドに捌けていく。

試合開始から3分が経過し、点差は9点ビハインド。今までのA～Eのチームの中でも最低の成績だ。

原因のほとんどは石太の無茶なオフェンスにある。パスを貰うと回りには一切目を向けず、俺がマークを振り払ってフリーになっても無視を極め込む。そして無理矢理に中に突っ込んでいきボールをカットされる、もしくは遮二無二シュートに向かい、リバウンドを奪われる、のパターンだ。結局、相手のカウンターを喰らってしまい点を取られてしまう。

しかし、石太は悪びれることもなく、リバウンドを取れなかった木村や、セーフティに戻っていなかった俺達にひたすら毒を吐いては、役立たずを見る目で睨んでくる。で、そのフラストレーションを開放するかのように一人で突っ込み、また潰されるのだ。

俺はそんな悪循環を止めるため、審判にタイムアウトを申告した。

「お前ら！　何度いったらわかるんだ！？　早くセーフティに戻れと言っているだろう！　センターの奴はリバウンドの一つも取れないし、弱小中学の奴はこんな基本的なことも出来やしないのか！？」

石太の理不尽な言い様に、俺達は激しい怒りを感じた。

すると、中田が突然石太に近寄り、怒りを露にした表情で怒鳴り出した。

「てめぇ、ふざけんなよ！！　一人で勝手に行きやがって！！　少しは周りを見てパスを出しやがれ！！　その上、早くセーフティに戻れだぁ！？　てめぇは一回も相手のドライブを止めてねぇくせして、勝手なこと言ってんじゃねぇよ！！」

「なんだと！？　下手くそなくせに生意気なことを言うな！！　僕を誰だと思っているんだ！？」

「ちょ、ちょっと！？　二人とも、落ち着いて！」

喧嘩を始めた二人を西山が止めにかかる。木村も止めにかかるか迷っているが、石太に対する怒りの所為か、行動に移すことができない。

ぎゃあぎゃあと口喧嘩をするのが二人。
それを宥めようとするのが一人。
その横でオロオロしているのが一人。

……メンドクせぇな。

「静かにしろ、お前ら。今から体勢を立て直す。俺の言う通りに行動しろ」

「と、篤川くん……？」

「あ？　……本気で言ってるのか？」

俺の言葉に反応して、俺を見つめる西山と中田。そして、

「はっ！　いきなり何を言い出すんだ？　お前なんかに一体何が出来る？　たいしたドライブもできないくせして」

呆れた表情で俺を蔑む石太。
そんな石太は無視して、続きの内容を告げる。
「西山、基本的にボールは俺に集めてくれ。俺の手にボールが渡ったら、後は好きに動いて構わない」
「わ、わかったよ」
西山が頷く。
「あと、ディフェンス。俺のマークがボールを持っているときは、ヘルプの準備はしなくていい。パスをさせないことだけを考えてくれ」
「ち、ちょっと待て！」
俺の作戦に、中田が意義を申し立てる。
「お前のマークって、二年生のレギュラーの人だぞ！？　それをお前一人で止めるっていうのか！？」
「大丈夫だ。俺を信じろ。あの程度のレベルなら、いくらでも止めてやるよ」
「本気かよ……」
中田が眉間にしわを寄せて疑いの目を向けた。木村も俺の言うことが信じられないのか、目を見開いて、俺を見つめている。
『タイムアウト終了！』
審判がタイムアウト終了の宣言をする。俺達は残りの時間、タイ

ムアウトを取ることができない。

「とにかく、今から状況をひっくり返すにはこの方法しかない。皆、協力してくれ！」

「「「おう！」」」

俺はチームの勝利のため、再びフロアに戻っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

篤川クンのチーム、えらい離されてもうてるけど、大丈夫やろな？

一人めっちゃ自己中な奴がおるけど、そいつをなんとかせな、点差を縮めることは出来ひんで。ああゆうタイプは、自分以上の実力を見せつけへんかったら、言うこと聞かへんからな。なかなか難儀やで……。

にしても、篤川クン、か……。出身中学は全くの無名やのに、茨山に堂々と入学してきた男。普通は自分の実力も鑑みて、それ相応の学校に行くもんや。

やけど、篤川クンは全く臆することなくバスケ部を申し込んだ……。それに、ホンマの実力を持った奴にする独特の“匂い”……。きっとかなりの実力を持ってるに違いない！

さぁ、見させてもらうで……！　篤川クンの本当の姿を……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『では、試合再開！』

審判から渡されたボールが、相手チームのスローインによってコートに投げ込まれる。

篤川は早急に自分のマークマンを探し、ディフェンスのポジションについた。

「やあ、一年生君」

突然、マークマンの相手が篤川に話しかけてきた。中田の言っていた二年生のレギュラーの男である。

「さっきのタイムアウトの作戦、ちょろっと聞いちゃってさ。俺を一人で止めてみせるらしいじゃん？」

「……そうっすね。そうでもしないと勝てないんで」

篤川が言うと、彼はキッと目を細めた。

「どこの中学の誰かは知らないけど、俺を、いや、茨山をナメてるでしょ？　一年のくせして、そんな簡単にいくはずないだろう？」

「そうっすかね。案外サクッといけたりしちゃいますかもよ？」
「ふ～ん……結構自信ありげだね」
彼は味方からのパスを受け取り、姿勢を低くした。篤川もそれに合わせて全神経を集中させる。
「じゃあその考え、ちょっと改めて貰おうか、なっ！！」
その男は一気にスピードを上げ、篤川の右足の横に自らの左足を踏み込む。あっさりとディフェンスを抜いたことに優越感を感じた彼は、すかさずドリブルをしようと、自分の手を斜め下につき出す。
瞬間
彼の手からは、すでにボールは消えており、自分の右側にいる一年生の手に渡っていた。
彼がその事に気付く前に、二歩、三歩と足を踏み出していた。その間に篤川は、速攻を仕掛けるため前にボールをつき出す。
「「「あっ！！」」」

彼だけでなく、彼のチームメイトも驚愕したように声を上げていた。

しかし、時すでに遅し。篤川はすでにゴールの近くまで走っていた。そして――

コガッ！！

高く飛び上がり、手に持ったボールをリングの中心に叩きつけた。

『『『ウオオオオォォォォッッ！！！！！』』』

サイドにいるギャラリーがにわかに盛り上がる。二年生の、しかもレギュラーのボールを奪い、速攻でダンクを決めたのだ。盛り上がらないわけがない。

「ほら。案外簡単にいくもんっすよ？」

篤川は、マークマンの相手にそう呟きかけて、ディフェンスに戻っていった。

「……っ！　やってくれるじゃないか！」

歯を食いしばり、彼はオフェンスに集中する。そして、再び自分の手にボールが渡った。

（……っ！）

篤川の周りから発せられるピリピリした空気。誰が見ても伝わる集中状態。それによる、全く隙のないディフェンス。

勝てない。

その言葉が彼の脳内を支配した。

「くっ……！　今田――あっ！」

慌てて味方にパスを戻すが、それをディナイディフェンスを張っていた西山がカットする。

なんとか味方がフォローに回ったお陰で速攻は防いだが、二度も自分の所為でボールを奪われた彼は、内心でかなり焦っていた。

（俺は上級生でユニフォームも貰っているんだ……。こんな一年生に負けたら茨山の看板に泥を塗る結果になる。なんとか、ディフェンスだけでもコイツを止めないと……）

彼はそう考えながら自分のマークマン、篤川につく。

「言っておきますけど、点差が点差なんで、本気で行きますよ？」
「あ、当たり前だ」
篤川が挑発的な口調で話しかけるが、ディフェンスをしている上級生は平静を保っている。
ガードの西山からボールが渡される。そして、軽くドリブルをつく。
「へぇ……あともう一つ、言わせて貰いますと――」
そして、低姿勢でディフェンスをする相手に向かい、一言。
「――それじゃあ、俺を止められねぇよ」
そう告げると、ノーフェイクで一瞬でスピードを最大にまげ上げ、ディフェンスを抜き去っていった。
「何だと！？」
後ろで構えていたディフェンスが、驚いた様子でヘルプに出る。
「中田！」
「おう！」
篤川は逃さずそのディフェンスがマークしていた中田にパスを出す。中田はゴール下でそれを受け取り、余裕でノーマークシュート

を決めた。

『何なんだ、アイツは！？』

『ディフェンスだけでなく、オフェンスでも上級生に勝ったぞ！』

『なんであんな奴が今まで無名だったんだ！？』

再びギャラリーがざわめく。それは上級生を抜いたことよりも、そんなプレーをした男を“誰も知らなかった”ことへのざわめきだった。

「もう一本、ディフェンスだ！　残り６分、絶対に逆転するぞ！」

「「「おう！」」」

篤川が声を張り上げ、味方を鼓舞する。

残り６分。Ｆチームは怒濤の攻めで上級生を苦しめ、最後にはとうとう逆転するまで奮闘した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日

「ふぁ～……。やっぱ朝はキツイ……」

昨日頑張り過ぎた所為で溜まった疲れに憂鬱になりながら、学校

までの道を歩いていた。
昨日、というのはもちろん入部試験のことだ。あの後、試合が終わった後に石太が『これで僕の合格は決まったも同然だな！　よくやったよ篤川！　お前実力は少しだけ認めてやる！』とかほざいていたが、お前が何をしたのか、何を理由に合格を確信したのか、最後まで自意識過剰なバカだった。

「おお、篤川クン。おはようさん」
「ああ、宮元か。おはよう」

後ろから笑顔で話しかけてくる宮元。見た目が女子なので、リア充爆発しろ的な視線が刺さってかなり鬱陶しい。

「いや～、昨日はホンマ凄かったな。篤川クンがそんなに巧かったなんて思わんかったわ」
「それほどでもねぇよ」
「またまた～。そんな謙遜せんと～」

宮元がバシバシと肩を叩いてくる。宮元は筋力はないのでそこまで痛くはないが、代わりに周りからくる鋭い視線がかなり痛い。

「で、合格者は下駄箱に合格通知が入ってるんだって？　無駄に凝ってるよな」
「まぁ、篤川クンは合格決定やな。ボクはちょっと自信ないな～。ボク、ほとんどパス回してただけやし……」
「……そうか」

お前も謙遜してるじゃねぇか、というツッコミは言わずに飲み込む。

「なんや、今のツッコミ待ちやったのに……。『お前も謙遜してるじゃねぇか』とか言ってくれれば満足やったのにな……」
「……そいつはスマンな。以後気をつける」
「ボク大阪人やから、ツッコミがないと死んでしまうねん。ホンマに気ぃつけてな」
「なんともメンドくさい民族なんだな、大阪人は」
「おお！　今のはええツッコミやで！」
「こんなんで満足なんか！？」

軽く宮元の生態に疑問を感じつつ、下駄箱に到着した。何の因果か、靴を入れる場所まで宮元の近くだ。

「さて、開けるで……」

宮元がおそるおそる中を覗く。
そして、中から薄い茶封筒を取り出した。それには大きく『男子バスケ部』と、達筆な字で書かれていた。

「どうやら、合格のようだな」
「みたいやな。じゃ、お次は篤川クンやな」
「はいはい」

俺も自分の靴入れの中を覗く。
見ると、俺の上履きの上に同じような茶封筒が置かれていた。

「俺も合格みたいだな」

それを取り出して、宮元に見せつける。そしてニヤッと笑うと、

二人同時に茶封筒の端をちぎって、中に入っていた小さな紙を広げて見た。

『1―C　宮元礼……合格』
『1―C　篤川海斗……合格』

第５Ｑ　瞬間（後書き）

※ディナイディフェンス……自分のマークマンに覆い被さるようなディフェンスでパスコースを塞ぎ、パスを入れさせないようにするディフェンス。ボールは渡りにくいが、ヘルプに出るのが遅れやすくなる。

誤字脱字、→の説明の訂正点などがあれば、ご指摘お願いします。

第６Ｑ　眼鏡の奴とデカイ奴

時は過ぎ、放課後。
俺達は再び第一体育館のフロアに立っていた。
周りを見ると、つい昨日まで余るほどいた一年生の姿が、今はもう数えるほどしかいない。このことから、ここにいるのは入部試験をクリアした者だけだと理解がつく。

「結構人少ななっとるな」
「ざっと見て１０人……それ以下か？」
「いや～。よう生き残っとったな～、ボクら」
「……確かにな」

最初３０人だったのが、一気に１／３以下にまで減ったのだ。それだけ厳しい試験だったということは火を見るより明らかだ。普通にこの高校の倍率より高いし（１．２倍－３．０倍）。

『全員集合！　一年生も集合だ！』

突然キャプテン（蛇手先輩）の声が響き、一年生が慌てて集まる。
俺と宮元は偶然近くにいたので焦る必要もなかった。

「全員集まったな……。さて、皆に伝えることがある。まず一年！」
『『『……っ！？』』』

突然呼ばれたからか、半数の一年生がビクッと震えた。

「とりあえず、試験はこれで終了だ。合格者は８名。よく頑張ったな」

『『『おおお……！（パチパチパチ）』』』

キャプテンの言葉と同時に、他の先輩たちからも賞賛の拍手が鳴った。

「だが、ここで自惚れてはいけない。過去に試験を合格した者も、練習の過酷さ故に辞めていった奴は多数いる」

「「「「……」」」」

「お前らは試験で『耐え抜けるだけの力がある』と判断されたんだ。期待外れな真似はするな。わかったな？」

「「「「……はい！」」」」

一年生の返事がハモった。

「それと上級生、これが終わったら、自分達だけで練習を始めておいてくれ。俺は顧問と少し話があるから。頼んだぞ」

『『『うす！』』』

「よし。じゃあ適当に自己紹介でもするか。とりあえず一年は前に並んでくれ」

一年生がゾロゾロと前に出ていく。正直自己紹介の類いは苦手なので行きたくない。

「ん？　どうした、はよ前出な」

「あ、ああ」

しかし、宮元が無理矢理俺を引きずり出した。

俺は仕方なく宮元の隣、列の一番左の位置に立つ。

「じゃあ右から出身中学と名前、身長体重、ポジション、自分の目標、を順番に言ってってくれ。じゃあ一番右」

「は、はい！　祭禅西中の――」

一番右の奴が自己紹介を始めた。

俺はふと、最初の試験の時のことを思いだし、宮元に話しかける。

（なぁ、宮元）

（ん、なんや？）

（スポーツテストの前の時に言ってたお前の知り合いって、今残ってるのか？　確か、サナダとオダ、だっけ）

（残っとる残っとる。ホラ、そこの眼鏡の奴とデカイ奴がそうや）

そう言って宮元が指を差した方を見てみると、一人飛ばした所に眼鏡とデカイのが並んで立っていた。

どちらも強豪校の選手のオーラのようなものが出ている。

「――ろしくお願いします」

「……よし、じゃあ次」

そうしている内に、眼鏡の奴にバトンが渡った。

「はい。愛知、傘前（さんぜん）中学出身の砂灘史郎（さなだしろう）です。１７９ｃｍ、７０ｋｇ。ポジションはシューティングガード（ＳＧ）です。先輩方のお役に立てるように努力しますので、何卒よろしくお願いします」

ピシッと背筋を伸ばし、やけに丁寧な立ち振舞いを見せる砂灘史郎。緑色の眼鏡をかけ、宮元とは違った濃い短めの茶髪を持つ。身長は俺よりも少し小さい。顔立ちは……まぁいい方だと思う。ここからでは何かと見づらいのだ。

「よし、次」

あっさりとスルーし、次の人、やたらとデカイ奴の番だ。

「……岡山、南飯嶌中出身、小田毅。１９６ｃｍ、９５ｋｇ。ポジションはセンター（Ｃ）。目標はレギュラー入り。いずれスタメンも取るつもりです。……よろしく」

単調な言葉で自己紹介を終えた小田毅。短く刈り込んだ坊主頭で、顔の表情の起伏がほとんどない印象を受ける。それより、なんと言ってもデカい。その言葉だけでコイツを形容できそうな程だ。これが高１とは思えない。

「よし、次の奴」

これまたスルー。資料で見たからか、あまり驚く様子は見られない。

そして次の奴の自己紹介も滞りなく終わり、宮元のターン。

「大阪、今尾東中学出身、宮元礼です。１６７ｃｍ、５６ｋｇ。ポジションは見ての通りポイントガード（ＰＧ）です。ま、とりあえず目標は、ボクを男だと認識させることから……」

「バスケの目標言えよ」

あまりにも悲しい目標設定に、ついツッコンでしまった。

「篤川クン、ナイスツッコミ！　あ、とりあえずよろしゅうお願いします」

宮元がニコッと笑って一礼。

その破壊力抜群の笑顔は、先輩方の顔を赤く染め上げるには充分

な威力だった。

（無理だろうな……。宮元の目標は……）

「ん？　なんか言った？」

「……いや、別に」

指摘されて目を逸らす。

「オホン……じゃ、最後」

と、俺の順番がとうとう回ってきた。

「えー……。神奈川の克下（かつした）中学出身、篤川海斗（とくがわかいと）です。１８４ｃｍ、７５ｋｇ。ポジションはフォワード（Ｆ）。目標は……特にないです。よろしくお願いします」

目標はあえて言わなかった。

最後に一礼して終える。すると上級生の人達がボソボソと喋りだした。

『神奈川の克下……？　どこだソレ』

『そんな中学あったのか？』

『てか、アイツだろ？　篠山をコテンパンにした奴って』

『アイツ、しばらく部活休むらしいぜ。一年に負けたのが情けないからって』

いろいろ聞こえてくるが、とりあえず篠山先輩には謝っておく。

横でニヤニヤ笑っている宮元がかなりウザい。とりあえず脇腹に肘うちを喰らわせたら、『おお……ふ』と唸り、苦しそうな表情を見せた。

「っと、これで全員か。じゃあ今度は俺達だな」

と、キャプテンは俺達に向き直る。

「俺はキャプテンの蛇手啓一（だてけいいち）だ。倭田（やまとだ）中出身、１８９ｃｍ、８０ｋｇのパワーフォワード（ＰＦ）だ。今年一年、全国優勝に向けてビシバシしごいていくつもりだ。全員、振り落とされんようにな」

短く切った黒い髪にキリッとした目つきが特徴の蛇手キャプテン。はっきりとした言葉やその風貌から、キャプテンとしての威厳がありありと見てとれる。

ふと見ると、上級生の人達の顔が全員青い。そこまで厳しい練習なのだろうか。ある意味で楽しみだ。

「んじゃ、次は俺だねー」

キャプテンの自己紹介が終わると、スポーツテストの時に見た先輩が、気の抜けた声と共に前に出てきた。

「同じく倭田中出身で副キャプテンの丈田元基（たけだもとき）でーす。１８０ｃｍ、６９ｋｇで、ポジションはガード（Ｇ）とフォワード（Ｆ）でーす。まぁ、そーんなに気張らずに、気軽に話しかけてくれていいからねー。とりあえずよろしくー」

金色の長髪をゴムで後ろで束ねた髪型に、半開きでトロンとした目つきの丈田先輩。全体的にゆるい雰囲気で、蛇手先輩（キャプテン）とは全く逆の印象を受ける。

何故この人が副キャプテンなのだろうか？　ふと頭に疑問が浮か

ぶが、それは向こうの事情だ。口出しはしないでおこう。

その後も次々と上級生の自己紹介が続き、最後の人まで全て言い終わった。

「これで全員……ではなく、来ていない奴が三年で一人いる。そいつに関してはまた今度紹介するとしよう。では、一年に部室に関することを教える。丈田、あとは頼んだ」

「あーい。そんじゃあ、一年は着いてきてー」

丈田先輩を先頭に一年生がフロアを出ていく。俺はその後ろに着いて、他の一年を眺めていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺は丈田が連れていった一年を見送り、ハァ、と一つ息を吐いた。

（克下中、篤川海斗、か……）

今年合格した8名のなかでも唯一異質な存在。全く無名の中学校で誰も名前を知らない、しかしかなりの実力で、二年生のレギュラーを倒した男だ。

しかも克下中の記録を探ってみると、公式戦での記録は全くなし。完全に謎に包まれた学校なのだ。

これは……一回“アイツ”にも見てもらう必要があるな……！

＊＊＊＊＊＊＊＊

「――以上で、説明終了でーす。質問は……ないよねー」

丈田先輩の確認に、全員が首を縦に振る。

たった今部室内で、丈田先輩に部室の使い方などを教えてもらったが、特に変わったルールはないので割愛。

ついでに、何故か三年生だけは別の更衣室を使用しているらしい。男バスだけで更衣室を二つも所有しているとは驚きだ。

「あー、あと一年生はまだロッカー使えないよー。辞めちゃう人とかいるかもしれないからねー」

「その配慮は必要……なのか？」

「毎年いるんだよねー。練習が辛くて辞めてく人とかさー。だから一年生は毎年、最初の方はロッカー使わせてもらえないわけー」

「あ……そうなんスか」

辞める奴が確実に発生する練習って、もはやいじめ以外の何物でもないのでは？

「じゃあ、一年生は今日練習オフらしいからー。明日もこの時間に集合ねー」

そう言い残し、丈田先輩は部室を後にした。
そういえば、一昨日録ったドラマ、まだ見てなかったな……。

「じゃあ、俺も帰るとするか――」
「いーや、まだ帰さへんで（ガシッ）」

俺も出ていこうとするが、宮元に腕を巻き取られるように捕まれ、思わず立ち止まる。
振り返ると、身長差の所為か宮元が上目遣いで俺を見つめていた。

「……離せ」
「あれ？　おかしいなぁ……。大抵の男やったらこうしただけで、顔赤くしながら狼狽して、ボクの言うこと喜んで聞いてくれんねんけどな……」
「それさ、自分で言ってて悲しくなんねぇか？」

とりあえず、宮元が男だと認識される日は遠いだろう。

「二人に篤川クンのことを紹介したいんや。少しだけええやろ？」
「二人って、さっきの奴らのことか？」
「せや。前に篤川クンのこと話したら、えらい興味持ってな」
「へぇ……」

さっきの砂灘と小田が、ねぇ。俺も少しは興味あったし、別に急いで帰る必要もないしな。少しだけ付き合ってやるか。

「ま、別にいいけど」
「ホンマか！　じゃあ二人呼んでくるな」

ビュン！　ザザザッ！

宮本は嬉しそうに飛んでいき、一瞬で二人を連れて帰ってきた。コイツの得意なのは走ることであって、瞬間移動ではないはずだ。

「この人が篤川君ですね。なるほど、見たことのない顔です」

「……初見」

連れてこられた二人は、二者同様の反応をしている。

「篤川クン。こっちの眼鏡の方が砂灘で、デカイ方が小田な。二人とも全中の時に知り合った友達や」

「自己紹介のときに見たから知ってるけどな」

「んで、こっちがボクの言ってた篤川や。高校初の友達な」

「まぁ、それも聞いてますから知っているんですけどね……」

「……確認済み」

宮元の紹介は何を意味したのか。てか、宮本は何人友達がいるのか。いろいろ疑問が残った。

「えっと……。篤川海斗だ。三年間よろしく」

「ご丁寧にどうも。僕は砂灘史郎です。で、こっちが……」

「……小田毅」

「……です。彼はあまり喋りませんので、僕が代わりに挨拶をしておきましょう。三年間、よろしくお願いします」

いや、それも自己紹介のときに認識済みだけど……。とか言うのは野暮だろうか。

よし、じゃあお互い紹介も終わったということで、

「俺はそろそろ帰ら――」

「いーや、まだ帰さへん（ガシッ）」

部室を出ようとするが、またも宮元に腕を絡め取られる。

「……まだ何か？」

「いや、ちょっとしたことやねんけどな」

早くしてほしい。俺は帰って一昨日録ったドラマを見たいんだ。

「この後な、“四人で”マクド行くことになっとんねん。だから篤川クンも」

「約束がちげぇ！？」

少しで済むんじゃねぇのかよ！　しかも“四人で”って、もしかして俺強制！？

「いやいやいや！　俺は帰って一昨日録ったドラマを……」

「そんなんいつでも見れるやんけ。砂灘クンも小田クンもええよな」

「はい。僕は構いませんよ」

「……問題ない」

「ホラな。てなわけで、行こか。思い立ったが吉日や」

「俺は思い立ってねぇけど！？　――ってオイ小田ぁ！　俺を担ぐな、危ねぇだろ！　砂灘も笑ってねぇで止めろよ！　クソッ、宮元あとで絶対ボコるからな！　って危ねっ！　……」

その後、無理矢理連れていかれたマクドナ〇ドで、何故か俺が全員分を奢る羽目になり、録っていたドラマも消されていて見ることができなかった。

「……最悪だ」

恐らく俺の人生のなかで最も不幸な日だったであろう一日は、これにて終わりを迎えた。

第６Ｑ　眼鏡の奴とデカイ奴（後書き）

誤字脱字、訂正箇所、感想など、あればお願いします。

第７Ｑ　僕は死にません！

それは、ある練習中の出来事であった――

一年生の入部が正式に決まり、約一週間が経過。活動も本格的に始動し、朝にくる筋肉痛が辛くなってきた。

「よーし、５分休憩！」

『『『うーす……』』』

キャプテンの号令で、練習は一時休憩に。水道場へ頭を濡らしに行く人もいれば、まだ運動し足りないのか、ボールを持って自らシュートを打ちに行くチャレンジャーもいる。（蛇手キャプテンだ）

俺は壁にもたれながら、それぞれ別々に休憩時間を過ごす人達を眺めていた。

「篤川君。スポーツドリンクがありますが、いかがですか？」

タオルで汗を拭いていると、横から眼鏡をかけた砂灘が丁寧に尋ねてきた。

「ああ、ありがと。つか、タメなんだから敬語使わなくてもいいだろ」

「すいません……。親の教育で、こればかりは……」

「あ、そうなんだ。別にいいけどさ」

そんな厳しい教育をする親もいるのだなぁと、俺は一人思った。

「いやー。にしてもホンマにシンドイな。フットワークとかハンパやないで」
「……超鬼メニュー」

と、入り口の方から関西弁の宮元と、長身で坊主頭の小田が疲れた表情で入ってきた。最近は俺を含めたこの四人でいつもつるんでいる。

「二人とも、外に水を飲みに行ったのではなかったのですか？」
「おお、砂灘クン。もう全部先輩達が占領してもうてたわ」
「それは残念だな。ほら、スポドリ」
「お、サンキュ！」

宮本は嬉しそうにボトルを受けとると、その中身をすごい勢いで口の中に流し込んだ。“中身がすべてなくなるぐらい”。

「あ、もうないわ」
「オイ、小田の分は？」
「……俺の水を返せ（ギリギリギリ）」
「お、小田クン！？　痛い痛い痛い！　頭、頭離して！」

小田が宮元の頭蓋をこれでもかと言うほどに強く締め付ける。命の水（スポドリ）を盗られた恨みは怖い。

この光景を見て、ふと思った。

「つか、この部ってマネージャーとかいないのか？」

「「「……そういえば」」」

三人が口を揃えて同意する（もちろん、宮本はまだ解放されていない）。

実はこのスポドリは、用意する人が誰もいないからと、砂灘が寮の自室から自分で持ってきたものである。

だが、マネージャーがいれば、わざわざ自分で持ち込んでくる真似もしなくて済むし、飲料を巡って争いが起こることもない、ハズだ。

「確かに、一週間練習しとるけど、マネさんとか見たことないなぁ」

「……（コクコク）」

「今年は誰も志望者がいなかったのでは？」

砂灘が冷静に妥当な見解をすると、

「お、砂灘ー。それ正かーい」

「た、丈田先輩！？」

いつから聞いていたのか、丈田先輩が間に入ってきた。

「正解ってどうゆう事ですか？」

「だからさー。去年まで一つ上の先輩がマネージャーしてたんだけどー、今年からいなくなっちゃったんだよねー」

「そ、そうやったんですか」

「誰か入ってくれると助かるんだけどねー、マネージャー」

丈田先輩が困った顔で天井を見つめた。

「よっし、練習再開するぞ！」
『『『げっ！』』』
「……そんなに嫌なら、今からのメニュー、全部フットワークにしてもいいんだぞ？」
『『『よっしゃぁ！　練習やるぞぉ！』』』
「っと、練習始まるみたいだねー。んじゃ、無理しないようにねー」
「は、はい」
丈田先輩はそれだけ言うと、練習に混じっていった。
「つか、小田クン。水飲んでへんけど、大丈夫なんか？」
「……大丈夫だ、問題ない」
「ちょ、小田クン！？　なんかフラフラしとるけど！？　休んどった方がええって！」
小田は練習終わった直後にぶっ倒れましたとさ。

――そんなエピソードから時は過ぎ、翌日の朝。
高校に入ってから通いだした通学路も、そろそろ新鮮さを失ってきた今日この頃。最近は途中で出会う宮元と一緒に登校するのが日課となっていた。

「それにしても、マネさんな～」
「つっても、俺達に出来ることなんかねぇだろ」
「そうやけどな～。やっぱ欲しいよな～」

今話している内容は、もちろん昨日話題に上がった男バスのマネージャーについてだ。

「中学ん時はおってんで、可愛いコが一人。ほとんどの男子が告白して撃沈しとったわ」
「へぇ……中学でもマネージャーっているんだ」

中学でマネージャーをするという概念がないので、正直驚きだ。

「ま、告白された人数やったら、ボクの方が上やけどな！」

宮元が自慢げに胸を張る。

「お前結構モテてたのか」
「そりゃもう。毎日のように呼び出し喰らって、僕と付き合って下さい、って。ホンマ大変やったで」
「ふぅん……。って、『僕と』って男かよ！？」
「……そこは触れんとってほしかったな」

自慢げな様子から一変、一気に暗く、落ち込んだ表情になった。ズーンという効果音まで聞こえてきそうだ。

「だったら言わなきゃいいだろ……じゃなく、今はマネージャーの話だろ？」
「そ、そやったな。あーあ、誰か入らんかなー」

そう言って宮元は、まるでマネージャーになりそうな人材を探すように、回りをキョロキョロと見渡し始めた。

「あ、あのコとかええんちゃう？」
「ホントに探してたのかよ……」

宮元は後ろを指差す。その方向にいたのは寝ぼけ眼でゆっくりと自転車を漕ぐ、ツインテールの女子。たしかに、世間的にはかなり可愛い方ではあるが、

「お前、今から勧誘行ってこい」
「え、嫌やそんなの。篤川クンが行けばええやん」
「じゃあ変に探そうとか思うなよ」

俺は再び前を向いて歩き出そうとする。
が、振り向く前に、道端に落ちていた空き缶に目がいった。

「……なぁ、あそこに空き缶が落ちてるよな」
「ん？　まぁ、落ちとるな、空き缶」
「で、あの落ちてる場所って、あのコの自転車が通るコースに丁度重なってるよな」
「まぁ、重なっとるな、ピッタシ」
「で、あのコは寝惚けていて、まだ空き缶の存在に気付いてない、よな？」
「まぁ、気付いとらへんな、普通に」
「……」
「……」

彼女は何も知らずに自転車を漕ぎ進める。空き缶との距離は、ゆっくりだが確実に縮まっていっている。

「ぐっ……！」

俺はとりあえず走った。しかし、次第に自転車と空き缶の距離は0になり、

『え、きゃっ――』

彼女もろとも自転車は、車道側に転倒――

ガッ

「ふぅ……ギリギリセーフ」

――する前に俺が車道側に回り込み、倒れそうになるその体を支えた。

「え、あ、ありがとうございますっ！」

「あ、ああ。別に礼なんていらな――」

ブゥン！

「――い、けど……な！（ダラダラダラ）」

超スレスレで俺の背中を車が通過し、冷や汗が滝のように流れ出る。
彼女の顔を見ると、驚きと恐怖で顔が真っ青になっていた。そりゃそうだろう。俺が来なかったら、さっきの車が自分に直撃してたんだから。

「え、えっと……。じ、じゃあ、気を付けろよ」
「は、はい……。あの、ほ、ホントにありがとうございます」
「は、ははっ。べ、別にいいってことよ」

俺は轢かれそうになったショックをなんとか抑え込み、冷静に彼女を送り出した。
そして、未だに背中に走る冷たいなにかを感じながら、宮元の元に戻った。

「あかんやん、篤川クン。ちゃんとマネージャー勧誘せな」
「……！（ブチッ）」

で、迎えの理不尽な言い様にキレた。

「じゃあテメェできんのか。猛スピードで迫りくるトラックの前に手ぇ広げて飛び出せんのか。そっから『僕は死にません！』って大声で言えんのか！？　あぁ！？」
「いや、話大きなっとるし！　てか、首！　首が絞まっ……！　あ、ゴメ、ぐっ、ちょ……！　……！」
「……まぁ、今さら怒っても仕方ねぇけど（パッ）」
「げほっ、げほっ……。だ、だったら首絞めんとってぇな……」

宮元の首をある程度絞め上げ、丁度言い塩梅で解放する。宮元は若干涙目になっているが、俺はそれにときめくような男ではない。

「だが、名前すら聞けなかったのは正直痛いな」

「うん、それは確かにミスやな。篤川クンが轢かれそうになってなかったらな……」

「てか、あの車何故あんなにスピード出してたんだ？　ここたいして大通りでもないぞ？」

……やばい。あの車のことを思い出したら、さっきのフラッシュバックが……。もう車の話題はやめよう。

「せめて学年だけでも分かったらな……」

「一年生やで、あのコ」

「え、何で知ってんの」

「ネクタイが赤色やった」

「……あぁ」

そういえばそうだった。

この学校はブレザーのネクタイの色で、学年が分かるようになっているんだった。一年生は赤、二年生は青、三年生は緑だったハズだ。

思い返せば、さっきのコも赤色のネクタイしてたな……

「さすがは宮元。いい観察眼を持っている」

「それくらいは気付くやろ」

気付かなかった自分が恥ずかしい。

「一年生か……。じゃあまた会えるかもしれないな。その時にまた

勧誘すれば……」
「いや、今日ぐらいに会えるんちゃう？　案外バッタリな」
「え？　流石にそれはねぇだろ」
俺が軽く笑いながらそう返すと、宮元は呆れた表情で言った。
「会えるって。フラグ立っとるし」
「は？　何、なんて？」
「（さっきのコ、去り際にめっちゃ顔赤くしとったからな……。これは完全に脈アリやろ）」
「何か言ったか？」
「いや、何にもぉ」
「……？」
宮元は妙にニヤニヤと粘っこい視線をぶつけてくるが、俺はその理由が理解できなかった。

第７Ｑ　僕は死にません！（後書き）

誤字脱字、訂正箇所、感想などあればよろしくお願いします。

第８Ｑ　灯台もと暗し（前書き）

忙しい中、なんとか絞り出しました。
その所為で少し短め＆内容もぐだぐだ……

第８Ｑ　灯台もと暗し

授業中。

『――つまり、第一象限においてのｘ、ｙの値は――』

教壇の上で、眼鏡をかけた初老の先生が、黒板に描かれた二次関数のグラフを使って授業をしていた。

永年教師をしている所為か、この先生の授業はとても理解しやすい。問題を解く上での要点をわかりやすく説明し、解答までの流れを丁寧に示してくれる。

さらに、問題が解けない生徒に対しても、先生自ら優しく助言をするという、校内好かれる教師ＮＯ．１と言っても過言ではない、まさに教師の鑑（かがみ）のような存在である。

俺はそんな素晴らしい教師の素晴らしい授業を――

「……（ボーッ）」

――右から左へ受け流していた。

原因は言わずものがな、今朝の出来事だ。それが俺は運命的な出会いをした、とかだったらどれだけ良かったことか。

確かに出会いは会ったにせよ、世間一般では命を危険にさらしてまで求めるものではないと思う。あと数センチ後ろに下がっていれば……

「……（ダラダラダラダラ）」

……やめよう。いくらか寿命が減ってしまう。

俺の斜め後ろの席で、宮元がクックックとこらえるような笑いをしている。アイツは俺のような状況になってないから、暢気に笑っていられるんだ。一回アイツは『１０１回目のプ〇ポーズ』の名場面を演じてみるべきである。しばらくの間、トラックがトラウマになるだろうが。

余談だが、クラスの裏で、宮元のファンクラブ『合法的男性愛（ローフリィボーイズラブ）クラブ』が結成されているのだとか。勿論、メンバーの“ほとんど”は男子だ。

まぁ“余談”なので、今までの話の流れには全く関係ないないのだが。……俺は一人で何言ってるんだろう。

それより、その事件のときに出会ったあの女子だ。ネクタイが赤だったので一年生だろうが、彼女は大丈夫なんだろうか。一応俺が助けに入ったから怪我はないとは思うが、精神面で心配が残る。なにしろ、俺が来なかったら確実に天に召されていたのだから。

各言う俺も、あと一歩でも後ろにいれば……、やめよう。俺だって長く生きたい。

なんて思っていると、

キーンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムが鳴り響いた。
『――ではここの……おっと。チャイムが鳴ってしまいましたね。では、これで授業は終了です』
先生がチャイムと同時に授業を切り上げる。無駄に延長しない。これもまた好感度上昇のポイントだ。
『さって、もうお昼かー』
『タケ～。食堂いこうぜ～』
『ユウちゃん。一緒にご飯食べよー』
そして、今から昼休み。授業中ずっと上の空だったので、時間の経過の早さに少し驚く。
「篤川クゥン。今日はえらい上の空やったなぁ。どうかしたぁん？」
宮元がいやらしい笑顔を張り付けながら訊いてくる。事情を知っておきながら思い出させるよいな真似をするとは……。
嫌みな笑顔を浮かべる宮元に、若干怒りを孕ませながら答える。
「想像してみろ。プロ野球の投手の投げるスピードで爆走する鉄の塊がすぐ目の前を横ぎる状況を」
「プロ野球のくだりは過剰やけど……ボクやったら驚いて腰抜かしてまうな」
「だろ？　だが俺はそれを耐えたんだ。どう思う？」
「知らんがな」

これはまた厳しい評価。

「ったく……。ほら、さっさと飯食っちまうぞ」

そう宮元に呼び掛け、自分の鞄に手を伸ばす。

「いや、それはちと待って貰うで（ガッ）」

そして、そのまま弁当を取り出そうとする手を掴む宮元。そしてそのまま俺を引きずりながら教室を出て――って、

「おい！　どこ行くんだテメェ！　離しやがれ！」

「どこって……今朝のあのコを探しに行くに決まってるやろ？　せめて名前だけでも訊いとかんとな」

「だったら一人で行けよ！　何で俺まで連行する！？」

「そら、顔合わしたんは篤川クンやろ。フラグも立っとるしな」

「知るかよ！　何のフラグだ！」

「はぁ～。篤川クンって、案外鈍感やねんな」

俺が抵抗しようとするも、宮元はわけのわからないことを言って、全く相手にしない。

「それに、向こうも篤川クンのこと探しとるかもしれんやん？　やったらこっち側から会いに行くのが、礼儀ってもんやろ？」

「どこの地域の常識だよ、それ。てか、向こうも探してる？　んなことあるわけねぇだろ。期待しすぎだ」

「ほな、出発～」

「無視！？　俺の話聞いてる！？　っていただだだだ！　腕が、腕がねじれてる！」

結果的に。
宮元に強制連行され、今朝出会ったツインテールの女子を探す旅へと向かうことになった。

……が。

キーンコーンカーンコーン

「み、見つからへん……。こんだけ探したのに……」
「テメェ……。俺のランチタイムを、どうしてくれんだ……！」

俺達は教室前で息を切らし、目標の人物が見つからなかったことに肩を落としていた。
結局俺達は、昼休みという貴重な時間を、人探しという無駄な労力で全て使い果たしてしまった。
考え得る場所はすべて潰したはずだ。他のクラスの教室は勿論、食堂、体育館、中庭、運動場、保健室、職員室、各講義室、屋上まで、まさに学校中を駆け回るように探した。
それでも、探し人が見つかることはなかった。

「なんで見つからへんのや……？」
「そら、相手が絶対一定の場所に留まるわけじゃねぇからな。どっかですれ違いになったんだろ」
「要は探す順番をミスったってことか……」

「それ以前に、無理に探そうとすること自体がミスだろ」
相手は同じ学校の一年だ。いちいち探さなくでも、いつかは出会うはずなのだ。その時までじっくり待てばいいだけなのだ。
「だから、もう探すような真似はすんな。わかったな」
「むう……。やったら次の休み時間に他のクラスに当たるしかないな」
「なぁ、俺たった今『もう探すような真似はすんな』って言ったよな？」
「よっしゃ！　頑張るで！」
「よし、一回落ち着こう！　落ち着いて俺の話をじっくり聞こうか！」
「篤川クンも、探すの頑張ってな！」
「しかも、俺の協力は決定事項！？　つか、マジで話聞けよ！」
二人で漫才を続けながら、教室の扉を開けて中に入る。
そして教室内であることを考慮し、ボリュームを下げて宮元に指摘する。
「いいか。休み時間に他クラスを当たるのはもう構わないが、俺を巻き込むのはやめろ。教室を当たるだけなら、一人で十分な筈だ」
「え？　篤川クン、協力してくれへんの？　フラグ立ってんのに？」
「だから、何のフラグだよ。俺は次の休み時間に昼飯を食わないといけないんだ。どっかの誰かが俺を連行してくれた所為でな」
「そ、それは大変やなぁ」
宮元はバツの悪そうな顔をして、俺から目を逸らす。

「つーわけで、後は自分で何とかしろ。俺は一切干渉しない」
「しゃあないな……。篤川クンの立てたフラグを利用できひんのは厳しいけど、やってみるわ」
「だから、フラグって何だよ……」
最後に疑問を呟き、自分の席に向かおうと――

ガッ、カシャッ

――他の人の机にぶつかって、上にあった筆箱を落としてしまった。
その席に座っていた女子は、友達と喋っているときに机が動いたからか、少しびっくりした感じだった。
「っと……すまんな」
すぐさま落ちた筆箱を拾い上げ、机に置き直す。
「あ、す、すいません。ありがとうございま――」
その女子は少し遠慮がちに礼を言うと、俺の方を向いて固まった。
何かと思って、俺も彼女の方を向いて――
絶句。
俺の方を見つめている彼女も絶句。
一部始終を端から見ていた宮元も絶句だった。

俺は人生で初めて、この全てが固定されたような空気を直で体感した。今の状況。流石に言葉を失わずにはいられない。

俺達が昼休み中、ずっと追い続けた人物が、目の前に、座っているのだから。

髪型、顔立ち、体格。どれを見ても今朝出会ったあのコと特徴が一致する。紛れもない、俺達が校内を走り回って探し回った女の子だった。

そして三人の心の叫びが見事に一致する。

（（（同じクラスだった――――っ！！））））

と、同時に、俺と宮元の脳裏に一つの言葉が流れ込む。

灯台もと暗し……

第８Ｑ　灯台もと暗し（後書き）

誤字脱字、訂正、感想などありましたら、是非ともお願いします。

第９Ｑ　マネージャー（前書き）

お久しぶりです。とりあえず、すいませんでした。

仕方ないので、ベッドの上で土下座しました。

第9Q　マネージャー

「いや～！　まさか一緒のクラスやったとは思わんかったわ！　のお、篤川クン！」
「うるせぇぞ宮元、もといバカ。自習とはいえ回りに迷惑がかかるだろうが」
「い、いや、別に私は迷惑なんか思ってませんよ？」
「ほらみぃや」
「……はぁ、もういいや」

六時間目。幸か不幸か、その日は先生が急な出張でいないため、生徒は思い思いの方法で自主勉強に励んでいた。
俺と宮元はＨＲ（ホームルーム）が終わるとすぐに部活に行ってしまうので、彼女――今朝の一件のコと話をすることが出来ないのだ。

そして今は、そのコと俺、宮元で机を囲んでいる。

「えっと……まずは名前教えてくんね？」
「あ、はい！　泡城舞（ほうじょうまい）です。今朝は助けていただき、本当にありがとうございます！」

彼女――泡城はイスに座りながら深く頭を下げた。

「まぁまぁ。気にせんでええって」
「お前が言うな。……でも、気にしなくていいのは間違いないな。もうこの話は終わりだ。二度とあの記憶を思い出させないでくれ」

「あはは……。やっぱり怖かったですか？」
「……アイツが目の前を１３０ｋｍ／ｈて走り抜けるぐらいはな」

そういって俺が指を指した先には、席に座って惰眠を貪る、体重１２０ｋｇの巨体の男子生徒――ラグビー部員の出武符敏（でぶふとし）の姿が。
それが１３０ｋｍ／ｈ――野球ボールの投球速度程で横切る光景を想像したからか、泡城と宮元は顔を青ざめた。

「分かっただろ？　だから、もうこの話はおしまいだ」
「はい……わかりました」
「なんか……ホンマにすまん」
「いいよ……分かってさえもらえれば」

しみじみとした空気が流れ出す。自習の所為か普段より騒がしい教室においては、そのギャップがなんとも不思議な違和感を回りに与えていた。
そんな雰囲気の中、泡城が一番に口を開く。

「えぇっと……二人の名前を聞いてもいいですか？　私あんまりクラスの人の名前、覚えてなくて……」

そういえば、まだこっちから名乗っていなかった。
入学からまだ数週間ほどしか経っていないからな。クラスメイトとはいえ、異性の名前をあまり覚えてないのも無理はない。

「オッケー！　ボクは宮元礼や。よろしくな、舞ちゃん！」

いきなり下の名前呼びかよ。異性でも見境なし、いや異性だからこそか？

「ま、舞ちゃん……？」
「気にすんな。コイツはバカなんだ。……で、俺は篤川海斗。よろしく」
「よ、よろしくお願いします……。と、篤川……君……／／／／」
……？　何でコイツは急に赤くなってやがんだ？　風邪でもひいたか？

「どうした？　顔赤いぞ」
「うえっ！？　な、何でもない……ですよ！？」
「そうか。それならいいんだ」

本人が何でもないと言っているなら何でもないんだろう。無駄に心配する必要はない。
隣の宮元が残念な人を見る目で俺を見てくるのだが、俺はどうすればいいんだろうか。一発殴ればいいのか。

「ま、まぁ。……わけのわからん唐変木クンは置いといて」
「唐へ……何て？」

宮元が何か言ったが、声が小さかったため、何を言ったのかははっきりとは分からなかった。だが、なんかすごく失礼なことを言われたような気がしてならない。
宮元は身を乗り出さんばかりに泡城に顔を近づけていた。その表情は真剣そのものだ。

「さて、舞ちゃん」
「は、はい。な、何でしょうか……」

泡城の言葉に戸惑いや虞（おそれ）の色が感じられる。宮元は急にニカッと笑い、言葉を発した。

「――バスケ部のマネージャー、興味あらへん？」

あぁ……。そういやそんな目的があった気がしたな……。

「えっ？　えっ？」

泡城は訳がわからずにおたおたしていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「い、１年Ｃ組の泡城舞です。き、今日はよろしくお願いしますっ！」

『『『いえぇぇぇぁぁぁぁぁぁ！！』』』

ここのバスケ部はバカばっかだ。俺は今日それを切実に感じた。

『それにしても、こんな可愛いコを連れてくるなんてな！』

『流石は宮元！　俺達とは違うぜ！』

『ていうか舞ちゃん！　俺と付き合わない！？』

「はっはっは。そんなことないですよぉ。篤川クンが手伝ってくれたお陰みたいなもんですよぉ」
「……はぁ」

激しく調子に乗る宮元。だが実際、俺は何にもしていない。
あの後、マネージャーなんて経験がないから出来ないと渋る泡城を、宮元は耳打ち一つで説き伏せたのだ。耳打ちを聞いた泡城は、これでもかというほど顔を赤くしていたのだが……。内容が気になる。

で、それでも即決はちょっとアレなので、今日一日は体験ということで交渉は成立した。

「泡城さん、だったな」
「は、はい！　えーっと……」
「俺はキャプテンの蛇手だ。宮元から話は聞いている。マネージャーの体験入部ということでいいんだな」
「はい、そうです」
「仕事に関しては上級生の奴らで指示していく。わからないことがあったら誰にでも訊いてくれ」
「わかりました！」

とても良い、清々しいほどに良い返事をする泡城。嫌な予感がビンビンするな……。

「うーし。じゃあ練習始めるぞ」
『『『おぉーっ！！』』』
「お、おー」

かくして、いつも通りの時間にいつも通りの練習が始まった。

――のだが……

「うっし、５分休憩！」
『『『うーっす……』』』

「あー、疲れた」
「あ、あの！　お水、どうぞ！」
「お、サンキュー」

ツルッ

「あっ」
「え？」

ガッッ（Ｔｈｅ　ｂｏｔｔｌｅ　ｈｉｔ　ｍｙ　ｎｏｓｅ）

「～～～～～～っ！？」
「ご、ごめんなさい！　ホントにごめんなさい！」
「あ、ああ。大丈夫大丈夫」

――――のだが……

「あーすまん。バンドエイド取って来てくれへん？」
「あ、はーい」

トテトテトテ

「宮元君、怪我でもしたのですか？」
「ドライブんときに引っ掻いとったみたいでな」
「それは災難ですね」

トテトテトテ

「宮元君、バンドエイド持ってきましたよ」
「あ、舞ちゃん。ありがとさん」

コケッ　ポロッ

「あっ」
「ん？」

ピシッ（バンドエイドの箱が傷口に……。）

「いっ～～～～！？」
「イタタ……。え？　だ、大丈夫ですか、宮元君！？」
「ハ、ハハハ……。大丈夫大丈夫」

「……日頃の行いが悪いからですよ」
「砂灘クン。後でゆっくりと話したいことがあんねんけど？」
「失礼ながら、お断りします」

――――――のだが……

「え、え～っと……次は……」

『いや～。やっぱ舞ちゃん可愛いなぁ～』
『失敗しないように頑張って、それで失敗しちゃうところが萌えるよな～』
『やっぱ女子マネージャーは最高だな』

「うぅ～……わ、わかんない」

『お、なんか困ってんぞ』
『ここは先輩として俺達が優しく教えるべきだよな』
『そうと決まれば、この俺が！』
『いやいや、ここはオレに任しとけって』
『いや、おれだ』
『オレダ』

「と、篤川く～ん。こ、これどうすればいいんですか～」

『『『！？』』』

「どうした？　何かわかんねぇのか？」
「タイマーの動かし方が……」
「はいはい……。メインの方はこれでスタートとストップ。２４秒はこれでスタートストップと、これでリセット。２４秒のやり方はわかるな？」
「はい。さっきセンパイに教えてもらいました」
「そか。じゃあ、またなんかわからない事があったら訊いてくれ」
「は、はい！　ありがとうございます！」

『……なぁ』
『……なんだ？』
『……あのコ、絶対篤川に気ぃ持ってるよな』
『……間違いないな』
『……現在進行で超嬉しそうな表情うかべてるしな』
『……殺すか』
『……よし、殺そう』

「ん、先輩？　どうかしたん――グホォ！？　いって……なんで殴るんすか！？」
『黙れこのリア充！』
『豆腐の角で頭かち割って死ね！』
『モテない男たちの恨みの一撃を喰らえ！』

「意味がわかんねぇ！」

「あぅ……また失敗」

というわけで、練習終了後……

「……（シクシクシク）」

泡城は校舎内のベンチで膝を抱えていた。まぁ、予想通りと言えば予想通りだ。

そんな彼女を、俺達は遠目から見守っていた。

「……かなり傷ついとるな」

「失敗続きで気が滅入っているのでしょう。お気の毒に」

「別に大して迷惑になるような失敗なんかしてねぇのにな」

「……俺としては、超どストライク」

「小田は黙れ」

確かに、ちっちゃいミスは結構してたかもしれないが……。少し神経質なところもあるのかもしれない。

「にしても、かなりの落ち込み様だな」

「そうですね……。このままではマネージャーを引き受けてくれるかどうかも難しいですね……」
「むう……。それは流石に困るなぁ……」
「……可愛い女子マネは必須」
「だから黙れよ変態」

とはいえ、引き受けてくれないと、部としても困る。どうにかしてフォローしないとな……。

「よし、篤川クン。舞ちゃんのフォローよろしくな」
「そうだよな。やっぱり誰かがフォローを……って、何故に俺！？」

別に俺が行く必要はないんじゃ――

「篤川君は紳士ですからね」
「フラグ持っとるからな」
「……厄介事引き受け役」
「お前らめんどくさいだけだろ！」

大体、この中で一番紳士な奴は、間違いなく砂灘だし、厄介事引き受け役なら、小田か宮元がお似合いだろう。あと、フラグってなんだよ。俺が行く意味が全くわからない。

「でしたら、ここは公平にじゃんけんでもいかがでしょう」
「オッケー。乗ったわ」
「……了解」
「つか、普通に考えてそうだろ」

男四人の拳が中心に集まる。
結果は――パー三人、グー一人であっさりと敗北。俺は肩を落と

しながら泡城のフォローへと向かうのであった。

泡城はまだベンチの上で体育座りをしている。正直、超話しかけづらい。
かなり暗い空気に躊躇いつつ、意を決して泡城の名前を呼んだ。

「ほ、泡城。隣、いいか？」
「……？　と、篤川君？」

泡城が顔を上げると、その赤くなった眼に、うっすらと涙が見える。
俺は返事を待たずに、彼女の隣にドカッと座った。その衝撃でベンチが微かに揺れる。

「……」
「……」

無言の時間がしばらく続く。時折、俺は何故こんなことをしているのだろうと疑問が浮かぶが、表情に出さないように努力した。
そんな中、真っ先に口を開いたのは――泡城だった。

「私、ダメダメですよね。失敗ばっかりで」
「……」

彼女は続ける。

「私、中学のときから失敗ばっかりで、でも高校に入ったら少しは変わると思ってたけど……何にも変わってませんでした」

「……」
「こんな私だったら迷惑ですよね……。やっぱり、マネージャーは他のコにしてもらって下さい」
そう言い残して、泡城は立ち上がった。
ガシッ
「ふぇ！？　な、何ですか！？」
気がついたら、俺は立ち去ろうとする彼女の肩を掴んでいた。
体が勝手に動いていたことに驚きを感じるも、それを脳で理解する前に言葉が出ていた。
「んなの関係ねぇよ」
「……？」
「だから、ミスの三つや四つや五つ、俺達はなんも迷惑には思っちゃいねぇよ」
「えっ、ちょっ！？（グイッ）」
「いいから座れ。まだ話は終わっちゃいねぇ」
頭上に？マークを浮かべている泡城を、押し付けるようにベンチに座らせる。

……我ながら何をやっているのか全然理解できない。だが、俺の言葉は勝手に続く。

「まず、一回試してダメだったからもうしない。俺はその考えが気にくわないな」

「は、はい……」

「高校入ったばっかりで何かが変わるわけねぇだろ。そうゆうのは、高校生活の中でゆっくり時間をかけて変えてくもんなんだよ」

「……」

……いや、俺も高1なんだけど。同学年のコに言える立場でもないんだけど……。

「七転八起の精神でやってけば、いずれ変わるもんだ」

「……そう、ですよね。すいませんでした」

何で俺は謝られたのか、そんな疑問を他所に俺の言葉は続く。

「それにな、俺にはお前が必要なんだ」

「えっ……」

あ、訂正。『俺は』じゃなくて『俺達は』な。間違いにはすぐ気づいたが、訂正してたら格好がつかないのでほっといた。

「だから、勝手にやめるとか決めんじゃねぇ。わかったな」

「あ、は、はい」
「それともう一つ。敬語やめろ。なんか違和感あるから。オッケー？」
「お、オッケー」
「よし。じゃあ俺は帰るからな」

明日も来いよ、と念を押してベンチを後にする。後ろからは『えっ？　えっ？』と泡城の戸惑いの声が聞こえてきたが、軽く無視った。

校門を出ると、宮元だけが妙に気まずそうな表情で待っていた。
「あれ？　まだ帰ってなかったのか？」
「ま、まぁな。篤川クンだけ一人で帰らすのもアレやから、な」
……何だ？　この宮元らしからぬしゃべり方は。……もしや。
「お前、俺の説得盗み聞きしてたろ」
「うっ！　……何でバレた？」
「勘だ」

宮元は意外に分かりやすい人間なのかもしれない。
「……でも、いきなりあんなこと言い出すなんてな」
「ん？　あぁ、あれか？　あれはなんつーか、勝手に喋ってたって感覚だったな」

全く、高1のくせに高校生活で何たらとか、本当にどうかしていた。それを聞かれていたとはかなり恥ずかしい。
そんな俺の反応に、宮元はスゥッと目を細めて、笑みを浮かべながら、

「ふぅん。何だかんだで、舞ちゃんのこと気にはなってたんや」

何てことを言い出した。

「……は？」
「まぁ、たしかに舞ちゃんは可愛いしな。大抵の男子なら気にはなるやろ」
「……いやいや、普通のフォローしただけだぞ。何でそこまで話が発展するんだ？」
「……え？」
「……ん？」
「「……？？」」

……時が止まった。

しばらくして、宮元が全てを察したようにため息を一つついて、
「やっぱり、篤川クンは篤川クンやな」
とか、訳のわからないことを言って去っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「泡城舞です。今日から正式に男子バスケット部のマネージャーになりました。何卒よろしくお願いします！」

『『『いえええぇぇぇぁぁぁああ！！』』』

男バスは相変わらずバカばっかりだった。

昨日の俺の渾身のフォローは何とか成功したようで、泡城はマネージャーとして男バスに入部した。何はともあれ、宮元発案のマネージャー獲得作戦は成功を収めたのであった。

マネージャーができた。男バス的に言えばかなりの変化なのだろうが、俺としてはあんまり変化は感じられない。

変わったことといえば、まず、

「じゃあ、よろしくね。篤川君」

「はいはい」

タメで話せる女子の友達ができたこと。そして、

「「「……（ニヤニヤニヤ）」」」
「……んだよ」
「いや、別にぃ？」
「何でもありませんよ」
「……自意識過剰」
「てめぇら……！」

三人の視線が鬱陶しくなったことぐらいだ。

第９Ｑ　マネージャー（後書き）

誤字脱字（ｒｙ　あればお願いします。

ＨＴ　新聞部の活動記録（前書き）

ＨＴ（ハーフタイム）ということで、本編とはほぼ無関係なお話です。
本当にどうでもいい話なんで、興味が無ければ流し読み程度でも結構です。

HT　新聞部の活動記録

――あ～、テス、テス。あ～、オホン。

皆さん、はじめまして！　茨山高校一年、新聞部の弐宮夏奈（にのみやかな）です！　今回は我が校が誇る、男子バスケットボール部の方々に直接インタビューをしていきたいと思います！

本来は部長の価貫（かつら）先輩がインタビューをする筈なのですが、何故か私に役目をおしつけてきたのです。お陰で私はあの男子バスケ部にインタビューできるわけなのですが！　本当に嬉しい限りです！

ここで少し、本校の男子バスケ部について説明を。

皆さんもご存知の通り、我が校の男子バスケットボール部はここ、神奈川県内最強のチームで、夏のインターハイ、冬の選抜にも県の代表として度々出場する、超強豪校なんです！

メンバーも茨山の納め役・蛇手啓一先輩を初め、超脱力系男子・丈田元基先輩など、全国的にも有名な、それはもうスゴい選手ばかりなのです！　こんなスゴい人達と同じ高校に通っているのですよ！？　信じられますか！？

痛っ！　誰ですか！　空き缶を投げてきた人は――って価貫先輩！？　す、すみません！　少し興奮してしまって……え？　謝罪はいいから早く進めてって……？　あ、はい、わかりました！　すみません！

それでは、インタビューに移りたいと思います！

まずはお馴染みのこの方です！　自己紹介をどうぞ！

「男子バスケ部キャプテンの蛇手（だて）だ。よろしく頼む」

蛇手先輩はこの学校の生徒会長でもあるのですよね。なにかと大変ではありませんか？

「問題ない。このくらい出来なければ、茨山のキャプテンは勤まらない」

キャプテンとしての責任がお強いのですね。

「当然だ。茨山は全国区の高校だからな」

なるほど。では、今年の一年生についてお話をお聞かせ願いますか。

「一年生か？　今年の一年生にはかなり期待できるな。その中でもさらに目をつける奴が４人いるのだが、彼らは近い将来、チームの柱となってくれるだろう」

そうなんですか。彼らの成長が楽しみですね。

それでは話を変えさせていただいて、休日はどのようにお過ごしなんですか？

「……それは答えないと駄目なのか？」

一般生徒のご質問ですので、できれば答えていただければと。

「そうか……。休日は、午前中はバスケの練習、午後からは勉強、という日がほとんどだな。たまに少し買い物に出掛けるぐらいだ」

その時はどちらまで行かれるのですか？

「掘り下げるな……。まぁ、ほとんどはコンビニかＢ－ｂａ○ｌだな」

なるほど。休日でもほとんどバスケと勉強につぎ込んでいるわけですね。

「ああ。……だが、その結論に至るまでに、最後の質問は必要だったのか？」

それでは、次の質問です。女子からも大人気な蛇手先輩ですが、彼女はいらっしゃいますか？

「本当に答えるべきなのか？」

これも一般生徒、主に女子からの質問になります。

「……いる」

実を言うと？

「……いると言っているだろう」

ですが、『蛇手は女子がまとわりついてくるのが嫌だから、彼女がいるフリをしているんだよー』と、丈田先輩が仰っていたのですが？

「丈田ぁ！」

で、実のところどうなんですか？

「……いない」

蛇手先輩は現在彼女募集中だというわけですね。これは女子生徒にとって嬉しい情報です。

「勝手に募集するな！」

では、次の質問です。これは新聞部からの質問です。

「……嫌な予感しかしないな」

スク水とブルマなら、あなたはどちらの方が興奮しますか――って蛇手先輩？　どちらに行くのですか？

「……ちょっと価貫の野郎を痛めつけてくる」

え、ちょっ、蛇手先輩！？　待って下さい！　インタビューは――

※蛇手先輩が静かに怒りの表情を浮かべながら席をたっていってしまいましたので、突然ながらインタビューはここで終了とさせて頂きます。
なお、このインタビュー終了後に何故か価貫先輩が保健室に運ばれていたことをここに記しておきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

続いてはこの方に来ていただきました！
では、自己紹介からどうぞ！

「あーい。三年の丈田でーす。よろしくー」

はい。皆さん言わずと知れた『超脱力系男子』で有名な丈田元基先輩です！

「その呼び方はちょっと馴れないけどねー」

では早速質問です。丈田先輩は男バスの副キャプテンとして、何か後輩に気にかけていることはありますか？

「うーん……。強いて言うなら、あんまし固くならないようにってことかなー。ホラ、うちはキャプテンがあんな生真面目さんだからさー、後輩はどうしても一歩引いちゃう感じになっちゃうんだよねー」

なるほど。それで丈田先輩はそんな感じでも後輩に慕われているのですね。

「そんな感じでもって、どうゆうことかなー？」

すみません、価貫先輩にこう返すように言われていたので……。

「……また価貫っちかー。一回厳しく言っておく必要があるねー」

それでは、次の質問です。ずばり、彼女はいらっしゃいますか？

「……それは答えないと駄目なんかなー？」

蛇手先輩も答えていただきましたので……。一般生徒の質問ということで丈田先輩も答えていただければと。

「はぁー……。……彼女はいないかなー」

では、彼女募集中ということで。

「いや、勝手に募集されたら困るよ！？」

では、次の質問です。

「ちょ、ちょっと待って！　ほ、ホントに彼女は募集してないから！　だからまとわりつくのはホントにやめてね！」

次は新聞部からの質問ですが……。

「……それは価貫っちからの質問と受けとるけど」

許嫁の板柿千夏（いたがきちなつ）さんとはどこまで進んだのですか？

「わぁぁぁっ！　なんでそれを言っちゃうー！？　ち、千夏とはただの幼馴染みで、別に許嫁って訳じゃないからー！！」

すでに〔検閲削除〕までは進んだということで／／／／。

「いうことで、じゃないよー！　勝手に事実を捏造しないでー！あと、恥ずかしいなら言わなくてもいいよ！　こっちまで恥ずかしくなるから！」

では、インタビューはこれで終了です。お疲れさまでした。

「ちょ、待って、席立たないでー！　とりあえず、その虚実ばっかり書かれた手帳をこっちに渡して――」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部員の方々へのインタビューはこの辺りにしておいて……。

次は、男子バスケ部の練習風景を取材させてもらおうと思います！　普段彼らがどのような練習をしているのか、必見です！！

さてさて、私は今男子バスケ部の活動場所である体育館に来ています。中からは迫力のある部員たちの声が聞こえてきますねー。

では、早速覗いてみましょう！　お邪魔しまーす……

『『『篤川を殺せぇぇぇぇぇ！！』』』

「ちょっ、待っ！　俺が一体何をしたと――」

『黙れ、俺達の永遠の敵が！』

『ちょっと目を離したらいちゃいちゃしやがって！』

『オレ達に対する当てつけか！？』

「いや知らねぇっすよ！　全然言ってる意味がわからな――あっぶな！」

……えぇーっと……。

「あの、どちらさんですか？」

あ、突然すいません。私は新聞部一年の弐宮といいます。えっと、マネージャーさんで宜しいでしょうか？

「宜しくない。ボクはこう見えても一応男や」

……え？　お、とこ？

「その反応、本気で傷つくねんけど……？」

失礼しました。では簡単な自己紹介と、今現在の状況を伺っても

宜しいですか。

「わかった。ボクは一年の宮元礼。性別は男、座右の銘は『人類皆兄弟』や。で、今現在は、休憩中にマネージャーの舞ちゃんが一年の篤川クンにくっついてたのを、二年生のセンパイ方が鬱陶しく思いはって、全員で篤川クンを追い回してる状況やな。あ、篤川クン捕まった」

非常にわかりやすい説明をありがとうございます。自己紹介のところに多少ツッコミ所はありましたが、これもインタビューの記事の参考にさせてもらいます。

「どうぞどうぞ。あ、篤川クンの反撃が」

……ところで、三年生の方々は止めないんですか？

「全員ほぼ無関心やな。蛇手センパイなんか向こうでシューティングしとるし」

……マネージャーさんは？

「ほら、あそこで何か知らんけど悶えとるわ」

まるで恋する乙女のようですね……。

「否定はせえへん」

ま、まぁ、この辺のことは記事にしてもしょうがないですね。

ところで、練習はいつ始まるんですかね？

「……さぁ？　あ、いつのまにか篤川クンが勝っとる」

で、ではこのまましばらく待つとしましょう。

誠に残念ですが、二年生の方々の不慮の事故で練習が再開されなかったため、取材はこれにて終了とさせていただきます。誠に申し訳ございませんでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の男子バスケットボール部の取材、いかがだったでしょうか！私個人的には練習風景を取材出来なかったことが誠に残念なのですが……。それでも、男バスの魅力が伝われればいいと思います！

それでは皆さん、またの機会にお会いしましょう！

提供・協力

茨山高校生徒会執行部
茨山高校男子バスケットボール部
～茨山高校新聞部～

「……で？」

思わず呟いてしまった。

さっきまで視聴覚教室で新聞部が作成した取材のビデオをバスケ部で確認していたのだが……全員唖然とした表情のまま固まっていた。

「どうですか？　私が三日三晩不眠不休で作成したビデオは！」

唯一元気そうにしている新聞部員。たしか、ニノミヤ、とかいったか。ニノミヤは手を腰に当てて、堂々と胸を張っている。

『どうって言われてもな……』
『正直言って、良いところが見つからなかったんだが……？』
『てか先輩達、なかなかのカミングアウトしてたよな』

『あと何で宮元は自然な感じで取材に混じってんだよ』
『もしかして、昼の放送とかで流す気じゃないだろうな……』
『マジかよ。それは、ちょっと……』

先輩の不満の呟きがちらほら聞こえる。端の方では蛇手先輩と丈田先輩が、複雑そうな表情で目を泳がしていた。
そんな状況が感じ取れないのか、ニノミヤが満足そうに俺達に言う。

「では、この映像を昼休みに校内で放送しようと思うのですが、今からアンケート用紙を配るので、賛成の方は――――」

結果など、言うまでもない。

ＨＴ　新聞部の活動記録（後書き）

誤字（ｒｙ　があれば指摘お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3199v/

無名のエース

2011年10月13日01時54分発行